

【完結】 ゆかりさんの弟はスペランカー系恋愛つよつよ勢です

永瀬皓哉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結月ゆかりの弟——結月たまきは虚弱体質である
成長期にも見放されたのか身長は姉より低く、

肌は白魚すら憐れむほどに病的な色白で、

男性ホルモンすらサボっているのかムダ毛もほとんど生えてこない

腕力勝負ではフィジカル低めの女子にすら組み伏せられ、

体力にいたっては自宅からそう遠くない勤務先に到着した時点で
息切れする

20歳に至る今日までどうやって生きてきたのかもわからないよ
うな、

そんな貧弱男子による恋愛模様の行く末は……？

目次

積極的な未成年女子を家に入れる成人男性	1
元カノ抱き枕とたまきの性癖	8
聖夜の性夜を掻い潜れ	14
彼女が元カノになるまでの経緯と譲れない想い	20
崩れていく関係をどうにかしたくて	25
脱衣に躊躇のない居候を大人しくさせる方法	32
退職へのカウントダウン	37
前の職場の末路と転職先	42
その豊満なバストはアウエーサイドであつた	49
成人男性が教える女子中学生の楽しい勉強会	55
奪い続けた果てに残つたもの	60
はよヨリ戻せとキレル妹	65
あんまりいじめちやダメですよ	71
終わりの始まり	77
弱くて情けない僕だとしても	82

積極的な未成年女子を家に入れる成人男性

曰く——『腹黒マイペース』『陽ダウンナー』『静かで穏やかなサイコパス』などと御大層な呼び名を賜ることの多いその少年は、そうした周囲の評価に対して極めて無関心であった。

彼のことを紹介する前に、まずは彼の姉について語らなければならぬ。彼の姉は結月ゆかり。外見は儂げな印象を受ける薄幸美人。中身は割とドライでズバズバとものを言う無遠慮タイプ。そのギャップに辟易する者と興奮する者の割合はおよそ4：6で後者に偏りがち。ギャップ萌えという文化が定着した日本人らしい。

そんな姉は……というか、そもそも結月家そのものが、彼に対して放任主義を貫いていた。それは決して彼が家の中で浮いているから、というわけではなく、姉もまた同じように親から放任されていて、弟も姉に対してさほど干渉しようとしなかったから。つまりはお互い様、ということだ。

しかし、転機は意外な時に訪れた。このジェンダーフリーの現代、姉が恋人として家に招いた相手が女性であったことには特に驚きはしなかった。弦巻マキ、と名乗る姉の恋人は十人が見れば十人が振り返るような美人で、彼に対しても明るく親しく接してくれた。おかげで、姉の恋愛については素直に応援できたのは幸いだっただけとも言えるだろう。

転機というのは、その直後のことであった。姉・ゆかりから告げられたのは、謝罪の言葉だった。まったく心当たりがなくて困惑する弟に対して、姉は下げた頭を上げようとしなかった。わけがわからず姉の横にいた彼女の恋人に視線を向けても、彼女すら姉を止めようとはしてくれなかった。

謝罪を突っぱねるにしろ受け入れるにしろ、まずは説明を求めなければ話が進まないと思ひ、姉の恋人はひとまず姉の自室で待機してもらい、姉弟だけの家族会議がリビングで開かれた。両親に関しては、出張でもうここ2年くらい会っていないので、元より憂慮する必要がない。

そして聞いた内容だが、弟にとっては「いまさら」の一言で片づけられるようなことであつた。そんなことで頭を下げる姉に対して、いつそ呆れればいいのか、それともそんな小さなことに気を揉んでいたのかと情けをかければいいのか、それすら判断に困るほどだつた。ようは、姉が中学に上つたあたりからずっと弟に対して距離を取るような態度を取り続けたこと、成人するようなこの歳になるまでそれを謝りもせず放置し続けたこと、そしてそれを何もおかしくないと思ひ込んでいたことを、ただひたすら謝られた。

だが、先程も述べた通り結月家はそもそも放任主義なのである。そんな家で、むしろ小学生時代だけとはいえ姉は弟のことを本当に可愛がつていたし、弟もそんな姉の愛情をきちんと受け取っていた。姉が距離を置き始めた頃も、その愛情があつたからこそ寂しくもあつたが、それが「仕方のないこと」だと受け入れられた。

だから、弟にとっては本当に「どうでもいいこと」であつた。家族とはいえ男女のきょうだいが親しすぎる方が世間的には異常だし、むしろ距離が開いたからこそ気楽な時もあつた。姉のことは今でも大事に思っているし、恋人ができたことも心から喜ばしく思っている。それでいったい何が問題になるのだろうか。

そう懇々と説明をして、ようやく姉は頭を上げた。そしてもう二度と知らんぷりはしない。変に他人行儀な態度をとらない。無暗に放置したりしない、と一方的な約束をされて、姉との関係は修復した。

——と想つたのが2年前。

昨年、姉は恋人であつた弦巻マキと結婚して姓と住居を変えた。門出の時にはそれはもうボロボロ泣きながら別れを告げられ、何かあればすぐに駆け付けるから、としつこく繰り返す姉を押し付けるような形で義姉となるマキに任せ、その背を見送つた。

そしてその半年後。つまりは今から一年半前に、出張先で両親が交通事故に遭い、帰らぬ人となつたことを電話越しに警察から告げられた。自分よりも先に姉にも連絡が行つていたようで、遺体の確認、葬儀の打ち合わせ、親戚への連絡等々で、そのあたりはとにかく慌ただしい時期だつた。

姉の結婚、両親の逝去を乗り越え、弟もようやく一年間の就職浪人を経て、春から地元企業に就職。一人きりになった自宅にも慣れてきた、はずだったのだが――。

「あつ、たまきさん！ 今日夕飯はたまきさんの大好物のシチューですよ！」

「いや、めちやくちや堂々と不法侵入するじゃん。こないだ取り上げた合鍵どうしたの」

「え？ ゆかり先輩にお願いしたらまた複製してくれましたよ？」

「お姉ちゃんさあ……」

先々月くらいから、伯母の旦那の姪――ようはほぼ他人みたいな親戚の娘が、この家に入り浸るようになってしまった。

彼女の名前は継星あかり。親族の集まりとかでたまに見かけることはあったが、それでも主に会話が合ったのは姉のゆかりの方で、確かに歳が近いのは自分――結月たまきの方であるが、それでもこうして家に押し掛けられるほど親しくなっていた覚えはない。

しかし、それでも事実として彼女はその接点の少ない彼のことを覚えていて、ゆかりに頼み込んでこうして合鍵まで作ってこの家に入り浸っているのだから、彼女にも何かしらの事情があるのだろうと、たまきもあまり追及はしなかった。もっと下心的な話をすれば、帰宅して食事を作らなくてもいいというのは、それなりに魅力的だった。

就職して半年、やつと業務に慣れてきたとはいえ疲れて帰って作る食事はどうしても簡素なものになってしまいうし、風呂やトイレの掃除は一日にどちらか片方だけになってしまつて、家全体の掃除は休日にしかならず体を休める時間は限られていたので、彼女がこうして家事を引き受けてくれているのは、いっそ助かってしまふところもあった。

……が、来年には成人とはいえあかりは今のところ未成年である。一つ違いとはいえ、成人男性が未成年の女子を家に入れていたというのは世間からの視線がどうしても冷ややかなものになるだろう。

近所付き合いはそれなりに良好な方であるが、あかりが親族であることを知る者はさすがに一人もいない。もはや一部からはたまきの

恋人なのではないかという噂まで出始めていて、さすがに痛む頭を隠し切れなかった。

そう思っただけで彼女から合鍵を取り上げたはずなのだが、ここでまさかの姉の裏切りが発覚。2年前あたりからやたらとたまきに甘くなり始めた姉が、嫌がらせをしてくるというのは考えられないし、ましてやたまきとあかりを天秤にかけて後者を選んでいるというのはそれ以上にありえない。

おそらく、姉はあかりがどうしてたまきを頼ってきたのか知っているのだろう。だからこそ最愛の弟の家に上がり込むことを許している。だが、それが弟にとって何一つ得のないことなら、さすがに許可しないはずだ。そう信じて、たまきはあかりに対して強く注意をするのをやめた。単にめんどくさくなつたとか、どうしてもよくなつたとかいう理由も、ないわけではない。

「あつ、そうだ！ ごはんにしますか？ お風呂にしますか？ それとも——」

「お風呂で。上がったらごはん食べるから、先に食べてもいいよ」

「でしたら、お背中流しますよ！」

「それは助かるけど、気持ちだけ受け取っておくね」

やんわりと断って、着替えとタオルを持って風呂に向かう。いくらなんでも、さすがに入浴中の襲撃はないだろう。あかりは無邪気と呼ぶには邪なものが端々にチラつくが、少なくとも『悪い遊び』に慣れているような子ではない。安易に肌を晒すような子ではないことは、この二ヶ月で理解している。

——と、思っていたのだが。

「お背中流しますよ！」

「ええ……ちゃんと断ったじゃん……」

「たまきさんは言葉が柔らかすぎるんですよ。あんなの断られた内に入りません！」

「嘘お……最近の女子大生こわ……。男の人にこういうこと普通にできると……」

「いやたまきさん以外にしたことないですから」

「出来れば僕にもしないではしかなかったなあ」

元々あまり怒ったり騒いだりする方でないのに加え、就職してからは仕事で肉体的に疲労していることもあって、『抵抗』や『争い』というものを面倒臭がる傾向に磨きが掛かってきた彼は、この時点で既に追い出す選択肢を捨てて、彼女の好きにさせた。

背中を流したいなら好きにすればいい。自分が男だということは彼女も理解しているし、その上で風呂に突撃してきているのだから、体の一部に何がっているかくらい把握しているはずだ。しかもここは銭湯や温泉でもなく自宅の風呂。体を洗うにはボディタオルを置いてあるので体を隠すものなどない。

これで悲鳴を上げるくらいならそもそも風呂凸などするなという話だし、遺伝によるものか元々体毛の薄いたまきはムダ毛もそう多くない。見られて困るようなものは無いのである。

「ごーしごーし、ごーしごーし。ふふっ、なんだかこうしてると新婚さんみたいですね」

「いや新婚っていうより風俗でしょこれ……」

「ひどっ!? 清純な女の子相手になんてこと言うんですか!」

「清純な女の子は男の入浴中にタオルも巻かずに突入してこないことくらい僕でもわかるよ」

むしろ新婚でもこんなセクハラ紛いの行動はとらないのではないのか、と出かかったツツコミは喉の奥に呑み込んで、あかりの為がままに背中を洗われ、自分で前の方を洗って風呂に浸か——ろうとしたところ、それを呼び止められた。

「たまきさんのお背中を流したので、今度はたまきさんがわたしの背中をお願いますね」

「……ボディタオルしかないけど」

「手でお願います」

「あっそう……」

言われた通りに手で背中を洗っていると、あまりにも力が弱かったのか「あの、ちゃんと触ってます……?」と訊ねられた時には、さすがに少し自尊心に傷をつけられた。

どうにかやり遂げて彼女も体を洗い終わると、そのまま二人で向かい合って風呂に浸かった。もうこの時にはお互いに身体はどこを見られてしまうとか、そういうことは気にも留めていなかった。

「ここまでやっておいてなんですけど、たまきさんよく受け入れてくれましたね。普通ならお風呂に入ってきた時点で追い出すとか、そうじゃないなら絶対エッチなことされると思ったんですけど」

「いや物理的に追い出せないから」

「あー……たまきさん、フィジカル面はわたし以下ですもんね……」

「あと手を出そうにもスタミナがもたない」

「クソザコじゃないですか……」

今度から風呂に入る時は絶対に鍵をかけようと心に決めて、「じゃあ逆上せる前にそろそろ上がるうか」と言つて、風呂を出た。

脱衣場でもやたらと接近しようとするあかりを言葉で押し留めて、留めきれず壁ドンまでされたものの、もしそれ以上に手を出せばさすがに実家に送り返されるだろうというのは彼女自身もわかっているのか、なんとか互いの貞操を保つたまま食事に至ることができた。

食事の際にはテレビに映るバラエティの話だとか、あかりが通う大卒での出来事だとか、平和で穏やかな時間がゆったりと過ぎていき、今日の危機は既に去ったものだと思っていた。思つて、いたのだが……。

「ええ……」

「寒いので早くお布団に入れてもらつていいですか？」

「なら服着なよ……」

「わたし寝る時は裸で寝る派なんですよ!」

「お姉ちゃんに確認とつていい?」

「ごめんなさい嘘ですゆかり先輩に通報するのだけはやめてくださいわたし死んじやいます!!」

どうやら彼女に限らず、姉の周囲ではこの二年の間に「めっちゃくちゃ弟に甘い」という共通認識が流布されたようで、まかり間違つても「絶対に結月たまきにだけは手を出すな」が合言葉になっているぞうだ。

ならなんであかりはこうして強硬手段に出ているのかといえば、
「ただし弟の合意の上のお付き合いは『ある程度』黙認するものとする」と本人の口から出たおかげだ。その『ある程度』がどの程度なのかはわからないが、まず間違いなく全裸で同衾までは許していないだろう。

「とりあえず服を着てきな」

「はい……」

「じゃあ僕寝るから、一緒に寝たい時はちゃんとした服装で来てね。おやすみ……」

「えっ、一緒に寝るのはOKなんですか!? ちょっ、たまきさん!? いいんですか!?! たまきさーん!?!」

スヤア……と穏やかな寝息を洩らすたまきに狼狽えながらも、翌日たまきの横にはきちんとパジャマを着こんだあかりがぐっすり眠っていたという。

元カノ抱き枕とたまきの性癖

その日は世間一般的に言うところの休日というやつで、朝から不満たらたらの内心をどうにかこらえて出勤した結月たまきは、休日出勤（今月2度目）という社畜の嗜みを終えて帰ると、そこには見慣れたヒールとブーツが並んでいた。

ヒールの方は、同居中の未成年女子大生のもので間違いなく、もう片方のブーツはというと、一時期ほぼ毎日会っていた「彼女」のものでだろうと、特にリアクションもなくのそのそと玄関を上がっていく。

「ただいま、あかりちゃん。それと、茜も」

「おかえりなさい、たまきさん！」

「おー、お勤めおつかれさん。お邪魔してんでー」

満開の笑顔で出迎えるあかりの奥でソファーに横になりながらひらひらと手を振るのは、たまきの高校時代からの腐れ縁であり——大時代は付き合っていた時期もある、つまりは「元カノ」の琴葉茜である。

元、とはつくが、決して険悪な別れ方ではなかった。むしろ、長年ほとんど友人と恋人の間を行き来するような関係だったからこそ、実際に付き合ってみたことで互いの関係性が何か気付いてしまった、という方が近いだろう。

つまるところ、この二人はどこまでいっても「友達」——もつと的確な言葉を探すなら、「親友」であったのだ。そして互いにその関係を心地よく思っていたからこそ、こうして「親友」という元の鞘に戻ることに躊躇がなかった。

今日もこうしてなんの連絡もなく家に上がり込んできていることも、たまきとしてはあかりとの同居よりは抵抗がない。

「上着とカバン預かりますよ」

「ありがとう。今はちよっと疲れて食欲ないから、ごはんは後にするよ。お風呂もその後で。一時間くらい仮眠とるから、そのくらいになつたら起こして」

「わかりました。今日はちょうどいい抱き枕もあるので、好きに使っ

ちやつてください」

「あれ？ 君もしかして今そこにいる僕の親友のこと抱き枕って言った？」

ねえ、ちよつと？ と問い詰めるようににじり寄ったところでどこ吹く風という様子のまま二階に上がっていつてしまふあかりを冷え込んだ瞳で見送ると、溜息をひとつ吐いて茜のいるソファへと移動する。

「ごめん茜、仮眠したいからちよつとどいてくれる？」

「えー、ウチもさつき横になつたばつかでやつとうとうとしてきたんやけど。あかりちゃんの言う通り抱き枕にしてもええからこのままにしてくれへん？」

「抱き枕扱いされるより動く方がイヤなの……？」

困惑と呆れの混ざつた表情を隠し切れず、かといつて彼女を物理的に退かそうとするには彼の肉体は貧弱すぎた。致し方ない、と早々に諦めをつけると、彼はソファと茜の間に体を滑り込ませ、そのまま彼女を後ろから抱き締めた。

姉とそう変わらない身丈の彼女は、成長しきつたこの年齢になつても姉をまったく追い抜けなかつたたまきの身長をやや上回り、抱き枕としては十分な大きさと温かさを保っている。

「茜」

「なんや？」

「懐かしいね」

「……せやな」

何が、と問うのは野暮だろう。

それ以上の言葉を交わすことなく、背後から洩れる寝息を聞きながら、茜も同じように意識を手放した。



「いや寝すぎじゃん……仮眠つてなんだっけ……」

「あー……ひつさびさにやつてもうたわ……。これは確実に怒られ

るやろなあ、葬に」

「お二人ともあの後ちゃん起こしましたよ。3回くらい頭引つ叩きましたけど、覚えてます?」

「いや全然」

ですよね、というあかりの呆れまじりの態度に苛立ちすら覚えなほほどに、二人はやらかしていた。

現時刻は午前8時半。たまきも茜も、急な呼び出しがなければ仕事はない。とはいえ、ここが住まいであるたまきと違い、茜はそうもいれない。ご近所とはいっても女性が男の家に入り込んで朝帰りとなれば、事実がどうあれ誤解は免れない。特に彼女の場合は――。

びんぽーん、という聞き慣れた呼び鈴の音が家に響く。それが二度、三度と続いたところで、あかりが玄関へと向かった。まだ話し声すら聞こえないが、たまきと茜には既に玄関の向こうに立つ人物に見当がついていた。

どしどし、と明らかに怒気の込められた足音が近付き、そしてリビングのドアが開く。

「お姉ちゃん……いい加減にたまきさんの家に行く度に朝帰りするのやめてくれる……?」

「あはは……お、おはようさん、葬……」

「たまきさんも、もうお姉ちゃんとはそういう関係じゃないんですから、男女の友人らしく適切な距離を保ってくださいます?」

「ごめん……」

やはり、とそこに仁王立ちで二人を睨むのは、茜の双子の妹の琴葉葵。二人が付き合っていた頃はたまきのことを「お義兄さん」と言うてからかいながら慕っていた彼女は、二人の破局と同時にたまきに対してだけでなく、姉の茜に対してもある程度のラインを引いた態度になつてしまった。

とはいえ、少なくとも表面的には良好なご近所付き合いを続けてくれている分、そもそも他者から向けられる視線にあまり関心のないたまきとしては、あまり精神衛生上の問題はなかった。むしろ、それで参っているのは家族として同じ家で暮らす茜の方だという。

「で、ちゃんと一線は保ったんですよね？」

「それ毎回聞いてくるけど、茜と付き合ってた頃ですらそういうことはしてなかったからね？ キスマでだからね？」

「そりやそうですよ。当時は学生だったんですから。でも、今はそうじゃないでしょう？ だったら、恋人でもない相手の男の家で一夜を明かした姉の心配をするのは妹として当然だとは思いませんか？」

「今日の妹って姉の貞操管理もしてるの……？」

「いや知らん知らんこわいこわい。少なくともウチの知つとる「当然」の範疇やない」

琴葉家の常軌を逸した「当然」に慄きながらも、ひとまず暴走し続ける葵を茜に任せて帰らせると、さてもうひと寝入り、とソファアーに横になる。

すると彼の懐に何かかもぞもぞと納まり、彼の頭が温かい何かに包まれた。

「昨日は茜さんに譲りましたので、今のうちに昨晚の分を補給させてもらいますね！」

「いやだからこの構図は風俗のそれなんだよ……。せめて頭の位置を合わせてくれないかな」

「こんなに可愛い女子大生の胸に頭を埋められておきながらそんなに冷めたこと言うのたまきさんくらいですよ」

「残念ながら僕は僕より身長が高くて慎まやかな胸の女性が好きだから……」

そう言うたまきの身長は154センチ。あかりよりも3センチ高いのだが、それよりもあかりにとって衝撃だったのは――。

「もしかして茜さんって付き合いの長さとか抜きにたまきさんの理想の女性……!?!」

茜の身長は158センチ。たまきよりも4センチ上で、何がというわけではないが、まったくくないわけではないものの平均的な女性よりも随分と大人しいサイズをしている。

「え？ うん。そりや女性としての魅力を感じない相手と付き合ったりしないし……」

「男の人ってみんな自分より若くて小さくて巨乳の女の子が好きなんじゃないんですか!？」

「偏見すぎすぎて笑う」

とりあえずたまきに巨乳フェチがないことを納得してもらおうと、あかりはおずおずとたまきと同じ頭の位置まで下がり、彼の脇に手を入れてその体を抱きしめる。

昨夜は休日出勤と思えない激務の末に帰宅して、そのまま風呂にも入らず眠ってしまっただけあって、普段よりも彼の体臭を強く感じてしまう。が、それでもあかりはブレなかった。

「もうこの匂いだけで興奮できます」

「こわ……。えっ僕このまま寝て大丈夫？ 起きた時に手遅れになつてたりしない？」

「大丈夫ですよ。わたしいつでも産む覚悟はあるので！」

「ちがう、そうじゃない」

さすがにこのままあかりの変なボルテージを上げ続けるのは危険だと判断したのか、彼女をソファアに置いて風呂に向かう。

が、しかしこの時たまきは既に少し眠かったのである。普段通りの冷静な判断力はどこにいったのか、背後から同じ歩幅で近づく気配に気づくことなく、風呂に入ってしまった。

「お背中流しますね！」

「えっ何、今日のあかりちゃんそんなに溜まってるの？ 自分の部屋で発散してきたら？ そのテンションのまま立て続けにガンガン来られるとさすがに恐怖を覚えるよ」

「いえ発散自体は今朝お二人を起こす前にしてきたので……」

「女子大生の性欲ってみんなそうなの？ えっこわ……。今度から道行く女子大生みんなケダモノにしか見えない……」

身近（半径1メートル以内）な女子大生によって世の女子大生にあらぬ風評被害がつけられたところで、とうとうたまきが白旗を上げた。

「あーもう、じゃあ後でまた眠るけど、そしたら僕が起きるまで接触禁止。それが守れるならいいよ」

「うーん……そうですね、今回はそれで妥協しましょう。今はそれよりもトランジスタグラマー低身長巨乳のよさをわかってもらう方が先ですから！」
「君はもう少し性欲を包み隠した方がいいよ」

聖夜の性夜を掻い潜れ

時は師走。常の作業量に輪をかけて多忙を極める時期であるが、道を行けばそこかしこに煌びやかなイルミネーションと幸せそうな笑顔で歩く二人組が散見する。

そう、今日はクリスマス。恋人たちにとっては一大イベントとなるこの日、異性の同居人こそ居るものの恋人のいないたまきは、「相手」のいる同僚たちの分まで仕事を投げつけられ、バツチリ残業コース。翌日の日の出と作業の終わりのどちらが早いかといえば、間違いなく前者だろう。

タイムカードは既に切っている以上、給料の発生しないこの盛大なサービス残業ぶりを見れば、福利厚生という言葉の軽さを思い知る。しかし彼はこのクソみたいな作業量を一人に任せることを良しとする職場に、今この時ばかりは全力の感謝をこめて目の前の仕事に勤しんでいた。

理由は明確。前日のクリスマス・イヴ。やたら精のつく料理を振る舞い、露出の多いサンタコスチュームを披露し、風呂だけでなくベッドの中にまで突撃——は、今回に限ったことではないが、とにかく同居人のアプローチが天を衝く勢いであった。

昨晩はどうか元カノを召喚することでことなきを得たが、本日はクリスマス本番。元カノは家族で過ごすというし、同居人もイヴとは違つて後がない状況に本気を出してくるだろう。

腕力にせよ体力にせよ人類の底辺を地でいくたまきが野獣と化した彼女相手に抵抗をしても意味など成すはずもなく、彼は貞操とサビ残を天秤にかけたのである。もちろん、結果はこれだ。

だが人間というものは不思議な生き物である。手を動かしていれば結果として目の前の仕事が減っていくという、至極当たり前のようなことにさえ、こういった追い込まれた状況においては悦びを感じるのである。

時間は深夜3時。俗に言う性の6時間とやらも終わりを告げる頃。すっかりハイになったたまきは、表情や行動にこそその変化は現れな

いが、視界から外した「終わった仕事」の量を見れば、彼の精神的窮地を推し量るには余りあろう。

12月末の日の出は7時前ほどであるが、すでに彼のこなした仕事は全体の9割に差し掛かり、このままのペースを維持すればあと一時間半でエンドマークを付けられるだろう。

そして、それを彼が望んだか否かにかかわらず、「その時」というものは来てしまう。

「——終わった。もう朝……え、暗っ。今なん……えつままだ五時前!?」

嘘でしよどう考えても始業時間コースだったじゃん!」

予定時間にかかなりの余裕を空けてのミツシヨコンプリートは、一周回って誇らしさよりも焦りや恐怖心というものを煽る時がある。

まして今回の仕事は数値入力・グラフ作成・文章作成などのタイプピング作業。誤字や脱字、改行ミスなどが大きく響くものばかり。集中していたのか高揚していたのか。慌てて後半の書類に目を通すが、どこを見てもミスらしいミスは見当たらない。

それでも今はまだ作業を終えてハイから抜ける途中段階なのではないかと、椅子から離れて自動販売機でコーヒーをひとつ購入し、伸びや軽い屈伸で固まった体を動かすと、再び椅子に戻って見直しをする。しかし、やはりミスはないように見える。

「ええ……嘘でしよホントに全部できてるじゃん……深夜のテンションってこわ……」

実際は深夜テンションだとかナチュラルハイだとかそういうものではなく、深夜になって雑音や光がほとんどなくなった状態で集中力が増した結果であり、一種のゾーン状態みたいなものだが、それよりも彼にとって重要だったのは、「今から帰れば一時間は寝れてしまう」ということだった。

クリスマス・イヴに意中の相手に元カノを召喚されて晩ごはんとかスチュームで高めに高めた欲望を溜め込んだままクリスマス本番に突入し、いつも通り出勤したと思ったら21時になって「今日は朝まで残業コースになったよ」というメールを受けていろんな苛立ちとムラつきを最高潮にまで高めた野獣の家で一時間も眠れれば、だが。

「……とりあえず今日は仮眠室で寝て、帰りはお姉ちゃん呼ぶか。というかこのまま年始までお姉ちゃんとマキ姉さんに居てもらおうかな……」

それが叶うかどうかはさておき、今の状況であかりに会えば間違いなく食われるだろう。ただでさえ残業と睡眠不足で疲弊したこの体に、彼女の有り余る性欲をぶつけられたら比喻でもなんでもなく絶命コースである。

命と性欲を天秤にかけてどちらが重いかなどサルでもわかる。いやむしろサルの方が心得てる。人類の一部はどう考えてもそつちじゃない方に傾く時がある分サルの方が正気まともだろう。

『今日サビ残だったんだけど、帰ったらあかりちゃんに襲われそうだから今夜一緒に帰ってくれない？』

『あら、昨日はお仕事だったんですね。わかりました。サビ残については後ほどしっかりお話ししましょうね』

『あと、よかつたら年始までマキさんも一緒に帰ってこない？　しばらくはあかりちゃんが怖い』

『珍しくたまきくんが甘えてくれますね。いいですよ、マキさんのお仕事も今年在宅ワークですし』

『ありがとう。じゃあ、また仕事終わりに。9時半くらいになるから、よろしく』

たまきの想像に反して、意外にも返答は好意的な了承。というか、たまきの中にある姉のイメージはそもそも数年前までの「放任主義だった頃の姉」であるため、現在の姉の行動や態度についてはほぼ想像の範疇でないことに、本人だけが気付いていない。

一応、放任主義を謝罪された際に言われたこと自体は覚えていたからこそ今回こうして頼ったわけではあるが、理解していてもイメージが変わるかどうかは別なのである。実際、今のやりとりですら「ええ……」だとか「自分でどうにかしなさい」と言われるものだと思っていた。

「さて、じゃあこれを部長のデスクに叩きつけて、仮眠しますか……」



「お仕事お疲れ様、たまき」

「久しぶり。おつかれさま、たまきくん」

「お姉ちゃん、マキ義姉さん、こんばんは。お姉ちゃんには今朝確認したんだけど、年始までほんとにいいの？」

「うん。というか少し時間かけてあかりちゃんのボルテージを下げていかないと僕の命が危ない」

二時間半の仮眠を糧にクリスマス翌日の激務を終え、会社の前で待つ姉と義姉を探すと、すぐ近くの路肩に停められた車から出てきた姉に抱擁つきの歓迎を受けた。

マキにも同じように腕を広げられたが、それはさすがに姉の目つきが鋭くなるだろうと遠慮し、彼女の趣味であろう真っ赤な車に乗り込んだ。

これだけ派手な車に乗っておきながら、マキの運転は随分と丁寧なもので、助手席に座る姉の様子も落ち着いていた。聞けば、昔はもう少しやんちゃな走り方をしていたそうだが、ゆかりを助手席に乗せるようになってから、そういった走りは封印したのだという。

元々、あくまで車が好きでただでそういう運転が好きだったわけではないし、安全運転を意識してみれば、それはそれでゆつくりと恋人との会話を楽しみながら走れるからと、不満もまったくないようだ。それでも、まだほとんど年季の入っていないピカピカのドライブレコーダー、汚れの少ないペダルとマット、明らかに純正品ではないシートカバー。気にして観察すれば、どこもかしこもマキの車好きとしてのこだわりが伺えるものばかりで、思わず萎縮する。

「そろそろだね」

「前に帰ったのはお盆でしたから、家であかりちゃんと会うのはこれが初めてですね」

「……あかりちゃん、死にたくなかったらちゃんとした服装で出迎えてね……」

淡い期待というものは、往々にして裏切られるものだからこそ淡い

ものなのである。たまきが二人を連れて自宅に戻り、鍵を開けると――

「おかえりなさいたまきさん！ さあここは冷えるので早くベッドに行って一緒にあったかく――」

「あかりちゃん？」

「……え、っ？」

たまき「たち」を迎えたのは、どう考えても裏に下着などを纏った様子のない赤い生地に白い綿をあしらったサンタ風の裸エプロンを身に着けた同居人であった。

いつもなら「ごはんor風呂orあかり」くらいの選択肢を与えてくれるものの、今回は前者二択をすつ飛ばして破廉恥ルックでお迎えwithベッドイン強制コース。予想を大いに上回るひどい有り様はたまきの呆れだけでなく、姉の内に宿る修羅をも誘った。

「ゆ、ゆゆゆゆゆかり先輩!? どどどどうしてここに……!」

「ここは私の実家ですよ。クリスマスも終わって、もうすぐ年も終わるといふ頃ですから、弟と後輩の様子を見がてら一緒に年越しをしようとして帰ってみれば、これはいったいどういう催しですか？」

「い、いやこれはその……ほ、ほら! 残業からそのまま仮眠室から出勤した家主様のために労いと……」

「たまき、あなたは普段からあかりちゃんにこんな労いをされて癒されているんですか?」

「普段からされてるけど癒された覚えはないし常々やめるように言い含めているけれど結果が出たためしはないよ」

視線をあかりから一切離さずに向けられた問いに対し、いつも通りのローテンションで返事をすれば、いよいよ修羅は悪鬼羅刹をも尻込みするほどの殺気を放ち始めた。

「たまき、マキさんと一緒にお夕飯の準備をお願いしますね」

「あついやお夕飯ならもう作っ――」

「言い換えましょう。『何も盛ってないお夕飯』の準備をお願いしますね」

「えっなんでバレ……ああーっ! 待つてくださいいゆかり先輩! 人

の腕はそつちには曲がらな——あああああああああつ！」

断末魔にも似た叫びを伴いながら二階に連れられていくあかりを見送ると、取り残されたたまきとマキは互いに目を見合わせ、溜息をひとつ洩らすとそのままキッチンへと向かっていった。

「苦労してそうだね、たまきくん」

「お察しいただけたようで何よりです」

彼女が元カノになるまでの経緯と譲れない思い

年末年始の攻防を乗り越え、姉と姉嫁の協力もありどうにか貞操を死守したたまきは、性の獣と化していたあかりが「人並みの変態」レベルにまで落ち着いたことを姉共々確認し、ようやく二人を家に帰した。

そこに行き着くまでに、三が日はおろか一月の一週目を費やすことになったが、それでもどうにか峠を乗り越えたとポジティブな方向に捉え、それでもまだ信用しきれなかった数日は茜を頼り——そして今日も、茜は結月家に訪れていた。

たまきの元カノと、たまきを今まさに狙っている異性。たまきが仕事で家に不在の時でも居座っている茜だが、意外にもこの二人の仲はさほど険悪でもなく、むしろ同性の友人としてとても良好だと言えた。

「お二人の距離感、おかしくありません？」

「距離感……？ 恋人やないけどウチらここらじゃ知らん奴おらんくらい親友やし……」

「親友でも向かい合って抱き合いながら何時間も読書しませんし、片方が寝てる時にもう片方がそれを抱き枕にして爆睡しませんからね」「いやいやそんなくらい誰でもやるやろ。……やるやろ？ えっ、嘘やろ？ みんなせえへんの？ ホンマに？」

「茜さんが本気でビックリしてることにわたしがビックリですよ」

たまきと茜の付き合いは高校時代からだ。中学まで茜は関西の方に居て、一度別れた両親の内、父親について関西に行ったのが茜で、母親と共に都内に残ったのが葵。高校に上がる直前、両親がよりを戻したことで姉妹共に暮らすことになったのだが、その時に姉妹の進学先に合わせて引越した先が結月家の真正面であった。

そのため、ご近所付き合いから始まった琴葉姉妹との関係は、同じ学校の同学年だったということもあり、当然のように深まっていた。特に茜とは入学直後の一年を同じクラスで過ごしたことや、体は脆弱だが口が達者で達観しているたまきと、関西弁で活発な印象はあ

るが実際は割とおっとりしている茜は、性格的な相性もよかった。

だからこそ、高校時代の友人は大学に進学してすぐに二人が付き合い始めた時は「やっとか」みたいな感想を抱いていたというし、二人が別れたという話を聞いた何人かの地元民は心底驚いて、その理由を聞いて納得もしていたという。

男女の愛において、しばしば「時間か質か」という話があるが、この二人の場合はその両方を兼ね備えていた。高校時代からすれば五年間、付き合い初めてから二年間。そして別れて9か月。二人はとにかく行動を共にする時間が多く、それ故に二人の間にある愛とも友情ともいえない繋がり「質」は時間に比例するように密度を増した。

しかし、青春時代を互いのために使い果たし、そして大学から今に至るまでお互い以外の異性をほとんど見てこなかった二人は、今になってようやく気付くのだ。

「もしかしてウチ、たまき以外の男の子との付き合い方わかってへん……？」

「えっ、ああいうの他の男性の方にもしてるんですか？」

「いやいやいや、さすがにウチかて誰にでもあんなんせえへんよ。でもほら、たまきは親友やからええもんやと思ってたわ」

「どう考えてもあの距離感とか会話とかは恋人のそれでしたよ」

「なんで付き合い合ってる時より恋人らしくなつとんねん……」

付き合い合っている時よりも、というのは、二人が別れる最大の要因に繋がる言葉なのだろう。先に別れを切り出したのは茜の方からであった。理由は、これ以上「恋人でいようとするたまき」を見ていられなかったから。

付き合いだしてすぐの頃には気付かなかった。しかし、数カ月もすれば彼の異変に気付くことは難しいことではなかった。

買い物をしていて、体力も腕力も貧弱なはずのたまきが荷物を持つと言いだした時。

普段からのんびりしているはずのたまきが、少し早めに待ち合わせ場所に着いた茜よりも早く待っていた時。

茜がアルバイトから帰る頃になると、たとえば一駅離れた場所に居て

も連絡を入れたら必ず迎えに来てくれることに気付いた時。

そして決定的だったのは、先に約束をしていた友人に頭を下げて、後から入った茜との予定を優先した時。

たまきはマイペースでおっとりとしていて、時々とんでもない毒を吐くこともあるが、それでもやはり根つこの部分ではとても義理堅い性格だということを誰よりも理解していたのが、茜だった。

だからこそ茜はショックだった。互いをただの親友だと思っていた時は、相手が茜であつてもよほどの理由がなければ「遊ぶ予定は先に約束していた相手が優先」と言っていたたまきが、異性との付き合いならばともかく同性と遊ぶ約束ですら、恋人であるという理由だけで自分を優先していることが。

友達と恋人の違いとは何か。「異性間の友情」というものを信じている茜にとつて、その差異を明確にすることは未だ叶っていない。性の有無、というのはもちろんあるだろう。しかし、だとしたら付き合い続けた三年間、一度も性的な交流のなかつたたまきと茜が「恋人ではない」などと誰が言えるだろうか。

そこで茜はひとつだけ基準を設けた。茜が他の異性の友人と接する時、会話の内容はどうしても共通する趣味の話題に偏る。これは、共通の話題がなければ性差による感覚の違いから共感しづらく、話を広げにくいからだ。

では、たまきとの場合はどうだろうか。共通の話題がないわけではない。むしろ、共に過ごした時間が多ければ、それだけ趣味趣向は近づくこともあるだろう。だが、ここ数年になつてから話題を探したことはない。自然と出る会話、時には会話すらなく、沈黙だけが漂うことすらある。それでも、その空気や時間に不満はない。

沈黙を良しとする関係とは、こうした「話題を探さなくてもよい関係」の極みともいえるものではないだろうか。そう思った時、茜はたまきが自分にとって真に「特別な人」だということに気が付いた。

「たまきはウチのことを大事にしてくれてはいたんやけど、そのせいで無理してもうてたし、たまきらしくなくなつた。せやから、お互いが大好きでいられる内に別れよか、つてなつたんよ」

「自分のことを誰より大事にしてくれたから、みんなを大事にしてた頃のたまきさんに戻ってほしくて恋人解消ですか。贅沢ですねえ」
「せやろ？」でも、ウチは別にたまきのこと諦めたわけとちゃうよ。たまきがウチのことを大事にして、それでいてみんなのことも大事にできるようになったら、今度はウチからちやんと告白する気や。せやから、あかりちゃんにたまきを譲るつもりはあらへんよ」
「もちろんです。大好きな人にはわたしの魅力を存分に思い知ってもらって、その上でわたしを選ばせるから意味があるんです！ 譲ってもらった勝利なんかには意味はありませんから！」

今はまだ親友という関係の方が、たまきらしいたまきと一緒に居られる。けれど、もしたまきが恋人になっても自分らしさを見失わないでいられたら。恋人だけではなく、友達や家族のことも恋人と同じ優先度で接することができるようになれば、その時は……。

いつになるかもわからない「いつか」までの日々を、茜はゆつたりと待つつもりでいるのだろう。それに、今回こうして恋人と親友という二つの関係を行き来したことでようやくわかったこともある。

異性への愛情と友情は、どちらかしか存在しないわけではない。どちらに傾くか、という違いなのだろう。だから、恋人であっても「友情」は存在していたし、親友であっても「愛情」は抱いている。

そして両方を行き来してなお「いつかもう一度」を願う茜と、そしてきつとたまきも、同じことを思うだろう。

——どちらにも傾かない関係が、「今」だ。

本当なら、同じ相手を求める者同士、互いを恋敵と見ていがみ合うのも致し方のないことだろう。それでも、この二人はそうではなかった。それは「たまきの良いところも悪いところも、この人なら理解してくれる」という一種の共感が生み出した奇妙な友情。

茜がたまきを想って別れ、いつかもう一度付き合いたいと思つているから。あかりが家を飛び出し、ゆかりに頼み込んでたまきとの同居を許してもらうまでに至ったから。互いに理由は違えど、たまきへの想いの強さは自分と同じかそれ以上なのではないかと認め合えるからこそ、その友情は成り立つのだ。

もしも茜があかりの行動力に負けて諦めてしまったら。もしあかりが茜とたまきの絆の強さに負けて諦めてしまったら。その時こそ、この二人はいよいよ修復不可能な亀裂が生まれるのだろう。

故に、どちらの手を抜かない。手を抜けば、たまきがどちらかを選んだ時に後悔が生まれてしまう。だからこそ、いつか訪れる「その日」に悔いがなくなるように、二人は各々のやり方でたまきを手に入れようと誓った。

決して互いの邪魔をしない。それは互いに取り決めた約束ではなく、二人の中の共通意識となっている。なぜなら、相手の邪魔をしている暇があるのなら、その時間を自分を高めるために使ったたまきにアピールした方が、たまきからの心証もよく、結果的に彼を落とすのに最短ルートだからだ。

「わたしは今こうして一緒に住んでますから、寝食たまに買い出しデートでたまきさんにアピールします!」

「ウチは昔の思い出話とかしながら、ゆっくり時間かけてたまきをこつちに振り向かせたる」

「わたしがたまきさんをもらいます」

「ウチがたまきを取り戻す」

互いに不敵に笑いながら、恋の炎を燃え上がらせる。

これは宣戦布告。そして同時に、互いを称え合う賛歌でもある。

負けないための恋路に、勝利はない。勝利に繋がるのは、いつだって「勝つための恋路」だけ。先に敗北の二文字がチラついた者が、この恋のレースからコースアウトするのだ。

「ふふっ、じゃあ今日はたまきさんが帰ってきたら一緒にお風呂に突撃しましょう!」

「あ、いやウチはそういうのはええわ。あかりちゃんだけでやってや」「ガチのトーンで引くのやめてもらえますっ?」

崩れていく関係をどうにかしたくて

「たまきくんは結局のところ、茜ちゃんとあかりちゃんのどっちが好きなの？」

あまりにも無遠慮にそう問いかけてきたのは、三年ほど前から同じ地域内に越してきたご近所さんで、茜や葵も混せて親しく接している東北家の次女、ずん子であった。

もちろん本名はもつとちゃんとした女性らしい名前だが、あだ名があまりにも本人の人柄や雰囲気にもマッチしているせいで、ずん子という呼び名がそのまま定着してしまい、本人によれば一年近く記憶を遡っても本名で呼ばれた覚えがないという。

「茜だけど？ え、もしかして僕あかりちゃんのことを好きなように見えるの？」

「ううん。ただ、たまきくんもなんだかんだ男の子だし、可愛い女の子に言い寄られて悪い気はしないだろうから、どうなのかなって」

「んー……もちろんあかりちゃんのこととは嫌いではないよ。でも、今のところ茜以外の女の子に対してそういう気持ちはないかな。お互い納得して別れたけれど、好きな気持ちは無くなってくれなくてね」「そっか。一途なんだね」

「どうだろうね。臆病なだけかもしれないよ」

二人は同じ町内のカフェでテーブルを挟みながら少し遅い昼食を共にしながら、こうして近況を話し合う。

ずん子には姉と妹が一人ずついるが、二つ上の姉は普段の仕事とは別にイタコのバイトが忙しいのか週一ほどしか帰ってこず、六つ下の妹は最近とても仲のよい友達ができたらしく週一くらいの頻度でお泊りをしているらしい。

そのせい、と言うと聞こえは悪いが、こうして寂しさを紛らわせるようにずん子が主導となって同年組——つまりはたまき、茜、葵、ずん子の四名で集まることがある。

ここに居ない琴葉姉妹というと、茜の寝坊のせいで身支度に手間取っているのだそうだ。おかげで、たまきとずん子だけで先にランチ

をいただいている。

たまきが就職してから、この同年組の集合はやや頻度が落ちていた。以前は月に一度程度であったが、前回から今回までに三カ月半という月日を要していて、彼の忙しさは同年組他三名の間でも苦笑いを伴ってネタにされていた。

しかし実のところ、たまきは半分ほど意図的に自分を忙しくしていたというか、この集会へ参加する頻度を落としていた。それはなんとなく、ずん子も察している。

「今から聞くのもなんだけど、次のお休みの予定っていつ？」

「まだわからないかな。会社は表向き日曜休みだけど、それが休日としての役割を果たしたことなんて数えるくらいしかないからね。あれは休日という名の「サービス出勤日」だよ。今日もいつ会社から連絡が来るか戦々恐々としながらここにいるしね」

『来月の最初の日曜日』は？」

「……………」

瞬間、たまきの目が見開いた。

正面のずん子は相変わらずにここにこと微笑んでいる。

「あかりちゃんに聞いたの？」

「うん。いくらブラックだって言っても、さすがに何カ月もサービス出勤させてたら労基署が黙ってないでしょ。ブラックなのは本当だろうし、実際サービス出勤もあるんだろうけど、でもちゃんと休日はあるんだよね？」

「……………そうだね。いやー、恥ずかしいね。忙しいアピールをしたけれど、実際はそうでもないってバレるのは」

「ううん。忙しいのは本当でしょう？ 特に、たまきくんの身体じゃ土日休暇でもツライはずなのに、よく頑張ってると思うよ。だから心配だったの。もしかして、最近あまり集まらないのは、わたしたちがたまきくんの負担に——」

「そうじゃないよ」

ぴしやり、と否定の言葉がずん子の声を遮った。

たまきは店員を呼んで皿を下げさせると、食後のレモンティーを追

加で注文して、もう一度ずん子に向き直る。そんな彼の表情を見て、彼女は思わず「しまった」と心の中で吐露した。

微笑んでいる。にこにここと。それがこの一年で彼が習得した『営業スマイル』だということは、すぐにわかった。元から作り笑いの上手な彼は、とにかく嘘が上手かった。いや、上手いというよりも巧いと言わなければならないか。とにかく、嘘と真実の配分が絶妙だと言える。どこまで本当で、どこからがそうでないのか、それがわからない。

そしてそういう時の彼の笑顔は、周囲の誰が見ても惚れ惚れするよきな愛嬌だというのに、それを向けられた者や親しい者だけが異様なくらいに薄ら寒さを覚えるような、そんな不気味で愛らしい笑顔だと彼女は知っている。今こうして向き合う彼の表情が、まさにそれだ。

「僕はみんなのこと、本当に好きだよ。茜も、葵ちゃんも、ずん子ちゃんも、僕の大事な友達だからね。君たちが僕に会社をやめろと言うのなら、僕は明日にでも辞表を出しに行くよ」

「そっか。でも、それならどうして最近はお休みの日に誘ってもあまり来てくれないの？ やっぱり疲れてたから？」

「それもあるけれど、それが理由なら『むしろ積極的にみんなのところに行く』ってわかって聞いてるよね。……なんて言えばいいんだろう。でもきつと、ずん子ちゃんはまだ答えがわかっているんじゃないかな」

「……意外だね。たまきくんならわたしを言い包めて誤魔化せはすなのにな」

「うん。できたと思う。けど……あんまりしたくないんだ。社会に出て働き始めて、いろんな人と向き合って、騙したり誤魔化したりしすぎたせいかな。もう君たちだけなんだ、嘘をつかなくていい相手は……」

この四人の関係は特別なものだ。ご近所付き合いから始まった関係ではないが、それだけに物理的に近い関係だった。困ったことがあればすぐに駆け付けられる距離だからこそ、もっと付き合いの長い知人よりも密接に関わり続けていた。だから、もはや家族にも近い感覚だということにはわざわざ口にもしない。

たまきの身体が脆いことは、この地域の者なら誰でも知っている。しかしその肉体的な弱さに反して、彼のメンタルは驚くほどに丈夫だ。滅多なことでは落ち込まないし、それなりの苦境もしれっと乗り越えられる。実際、両親を喪った時も姉と協力して、周囲の力も借りながらではあるが淡々と葬儀を執り行っていた。

自分の脆さを理解しているからこそ自分の限界をきちんと把握している。肉体的にも精神的にも「超えてもいい限界」と「超えたらダメな限界」を理解している。だからそういう意味では誰も彼を心配してはいない。茜と葵とずん子の三人を除いて。おそらく、あかりでさえ。

「本音を口にするのが怖いことだなんて、社会に出るまで知らなかったよ。学生時代、周りのみんながどれだけ僕のことを守ってくれていたかを痛感する。ずん子ちゃんにも、いっぱい助けてもらった……そう、本当にみんなに助けられたんだ」

——葵ちゃんにも。

いつの間にか運ばれてきていた手元のレモンティーに視線を落とす、ゆっくりと語り始めた。

「茜と別れることになった時、僕らは誰よりもまず葵ちゃんに話したよ。僕らのことを一番応援してくれていたのは葵ちゃんだったからね。時々からかうように「お義兄さん」なんて言われたりもしたけど……きつとあれは彼女なりに本気だったんじゃないかな。そうやってほしいと願ってくれていたんだと思う。そして、僕らはそれを裏切った」

「でも、理由は話したんでしょ？」

「うん。でも却ってそれが火に油を注いだ。なんで好き合ってるのに別れるんだとか、お姉ちゃんを捨てるのかとか、たくさん言われたけど……僕はそれに対して何も答えられなかった。葵ちゃんの言うことはどれも全て正しかったんだ。反論なんてできるわけがない」

そこからたまきだけでなく、姉妹の間にも亀裂が入ってしまったこ

とは、しばらく経ってから茜の口から聞いた。

今はまったくそんなつもりもないが、高校時代は茜よりも葵の方が、たまきに対して友情と恋の間で揺れていた時期があったらしい。しかし、その頃からたまきの視線はほとんど茜に向いていたから自然とその気持ちも薄れていった、と。

そしてそれを吹っ切るように、茜との仲を取り持っていたこと。二人が付き合う頃には、本心から祝福できるくらいになっていったこと。そして——二人の破局がそんな葵の心を引き裂いたこと。

「表向き、葵ちゃんは少しとげとげしてるだけで、今でも茜ちゃんとも仲よし姉妹って感じだよな。でも、たぶん未だに何一つ許してくれてないんじゃないかな。それは茜も感じてる。だから最近、茜がうちに来る頻度が増してる。家に——というより、葵ちゃんと一緒に居づらいいんだと思う」

「愛しさあまって憎さ百倍、かな」

「当たらずとも遠からずじゃないかな。茜は葵ちゃんと仲直りしたいみたいだけど……でもたぶん、仲直りできる方法はひとつしかないし、確率は半々って感じ」

仲直りの方法というのは、単純に考えてたまきと茜の復縁だろう。しかし、そもそも二人の破局が原因で火がついた問題だけに、自分との仲直りの手段として復縁したとわかれば、葵の怒りは今度こそ爆発するだろう。

それに、たまきも茜も葵のことは大事に思っているが、それと復縁は別の話である。いくら葵のためとはいえ、お互いに納得できないまま復縁したところで、今度はたまきと茜の間に明確な亀裂が入ってしまうことは、二人の共通認識だった。

「だからってわけじゃないんだけど、あかりちゃんにも茜が家にきたら出来るだけ理由を聞かずに家に入れるように言っただけだ。茜はあかりちゃんとも仲いいし、今はあんまり葵ちゃんと一緒に居ない方がいい。それはたぶん、僕も同じだと思う。だから、ずん子ちゃんに押し付けるみたいになってるのは……ごめん」

「謝られるようなことじゃないよ。友達が困ってたら助けたいってい

うのは普通のことじゃない？ それに、これはたまきさんと茜ちゃんのためだけじゃなくて、葵ちゃんのためでもあるしね」

「葵ちゃんがバイトするって言った時、ずん子ちゃんがすぐに引き受けてくれたのは本当に助かったよ。あの頃が一番荒れてたし、とにかく何をするかわからなかった。自暴自棄になって、あんまり良くないアルバイトをしてもおかしくない精神状態だった」

「情緒不安定だったのは会ってすぐわかるレベルだったもんね。見た途端に「あっこれやばいやつじゃ？」って思っただけ目の届くところに置いとかないと心配だったんだよね」

葵は元々、他者に依存しやすい性質を持っていた。元々は茜に、両親が離婚してからは母親に、そして両親の復縁から再び茜に——と、とにかく自分の価値を他者に奉仕することで見出すタイプだった。

そして茜がたまきと付き合ってから、たまきにも程度の差異はあれ依存していた。茜とのデートのセッティング、茜の好みのリーク、あるいはもつと個人的な部分でも、たまきをサポートすることで精神を安定させていたのだろう。

だが二人の破局で葵は壊れた。依存先というのは、信頼できれば誰でもいいわけではない。彼女の中では「依存するほどリスクとできる相手」にしか依存できないという一種のルールが存在した。だが、二人の破局はそのルールを狂わせた。理由は明らかだ。

「お互いに愛し合っているまま別れる」という、葵には理解のできない破局理由。それが彼女の中の二人に対するリスクを崩壊させた。そう、彼女は茜以上にとにかく恐怖していたのである。両親がそうであつたように——「愛する者たちが互いを裏切り合う」という『破局』それそのものを。

おそらく葵は、同年代の女子の中でも特に潔癖なタイプだったのだろう。あるいは清純ともいえる。『愛し合う者は互いを決して裏切らず、互いのために奉仕し合うもの』のように思っていたのかもしれない。だが両親がそうでないことを幼い葵に見せつけてしまった。そして、たまきと茜はそのトラウマを刺激した。

「今、葵ちゃんが一番頼りにしてるのはずん子ちゃんだ。おかげで妹

ちゃんには少し可哀想なことをしちゃったけど」

「きりたんにも事情は説明してあるし、あんまり喧嘩とかはしてないみたいだから大丈夫。まあ、葵ちゃんが帰った後のフオローが大変だったりもするけど」

「……今度、東北家に何かギフト送るよ」

ぬるくなったレモンティーに気付いて、冷めきらない内にと飲み干した。

まだ熱のあるレモンの苦味が、口の中に残る。

脱衣に躊躇のない居候を大人しくさせる方法

「そろそろ結納の準備をするべきだと思いませんかたまきさん」

「そろそろも何も、まずは今現在において付き合っすらいらないってこと再確認した方がいいよ」

「同棲してるんですから事実婚みたいな状況じゃないですか！」

「居候がいけしやあしやあと……」

その日は社内の機材メンテナンスと社用クラウドストレージの定期確認が同時に入り、どう足掻いても今日中には終わらない作業の「終了時刻までの自宅待機」という名の臨時休暇を勝ち取っていた。

なぜそんな偶発的な休暇を「勝ち取った」と言い切れるかといえ、通常業務の一部はアナログで実行可能であったため、数名の『敗北者』が存在しているからなのだが、上司に全力で媚びて普段の業務態度まで引き合いに出してようやく掴み取った休暇なのである。

しかしそうした涙ぐましい努力の末の勝利に腰かけて暴言にも等しい世迷言を投げかけてくる同居人を、たまきはソファーに横たわりながら軽くあしらっていた。まとも相手をしていたら、ただでさえ少ない体力を無意味に消費して、疲労困憊のところをベッドインまで持っていかれてもおかしくない。ここは肉食獣の檻の中。

「まあ結納はさすがに冗談ですけど、そろそろわたしのことを異性として意識し始めてくれない頃合いなんじゃないかなと思います。茜さんが素敵な女性なのはわかるんですけど、具体的にどこが茜さんよりダメなんですか？」

「茜より背が低くて、茜より胸が大きくて、茜より性に積極的で、黙ってれば浮世離れた美少女なところがダメ」

「それ普通の男性なら喜ばれますよね?！」

つまるところ、彼の理想というのが「自分より背が高くて胸と性が控えめな距離感の近い女性」であって、それに全てガツチリ適合するのが茜というだけの話である。少なくとも「あかりが魅力的に映っていない」というわけではなく、単に「好みのタイプから逸脱している」ということだろう。

しかしそれはそれで、あかりにとっては致命的だ。あるいは、興味の外側であつたのなら、興味さえ自分に向けてしまえばある程度は解決した問題であつたかもしれない。だが、彼はあかりに対してきちんと異性としての扱いはしているのである。

あかりを異性として見た上で、自分の好みの範疇でないからこそ、これだけ雑に扱っていられるのだとすれば、彼女は明らかな敗北を突きつけられているに等しい。が、彼女はくじけなかった。

「こうなつたらたまきさんにトランジスタグラマーの良さを叩き込んであげます！」

「叩き込むも何もバスタオルも巻かずにお風呂まで突入しておいてこれ以上なにか思い知らされることある……？」

「はい！ ベッド行きましょう！」

「お姉ちゃんを召喚します」

「ごめんなさい。お互い冷静に、腰を据えて話し合いませんか？ まずはその恐ろしい凶器から手を離してもらつても？」

なお、手を離していても音声入力ですぐ姉に通話を繋がられるように設定していることは彼女も把握しているため気休めではあるが、ひとまずたまきはスマホをテーブルに置き、あかりの出したお茶に手を伸ばす。

「……ねえ。一応、念のために訊くんだけど、何も盛つてないよね？」
「もちろんです。愛するたまきさんの体に変なものを入れるわけにはいきませんから！」

「そうだよね。僕もあかりちゃんがそんな人の道を外れたことはしなだって信じてるよ。今までも何度か盛られそうになつたけど未遂だったし、僕のことを本当に愛してくれているならそんなことするはずないもんね。僕が家の留守を安心して預けられるくらい信頼してるあかりちゃんならそんなことするはずないもんね？」

「あー！ なんか喉乾いてきたなー！ 最近あつたかくなってきたからですかね！ あつたまきさん申し訳ないんですけどそのお茶もらつていいですか！ すみませんね！ いただきま——すやぴい……」

「えっこわ……。即効性とかいうレベルじゃないでしょ……」



「——つてことがありました」

「フリからオチまでの流れが完璧すぎるやろ……」

「こう、なんですかね……。？ たまきさんってこういうお約束系のご全部外してくるんですよね。察しが良すぎるといっつか、鈍感とまでいかなくても普通なら狼狽えたり驚いたりするところでも平然と対処されるんですよ……」

元々、あまり動揺や狼狽が表に出る性格ではないが、特に彼がその傾向を深めたのが高校時代である。

早々に両想いとなった二人であるが、当初はたまきから茜への片思いから始まった関係でもあり、茜の鈍感さも相俟って彼はとにかく女性の機微に敏い男子として、男女どちらの同級生からも人気の生徒であった。そしてその敏さゆえに、男女どちらからも疎まれることもないわけではなかった。

そうした時、多くのピンチを切り抜けるための手札のひとつとして、彼のよく回る口先は多いに役立ったのである。特に、茜をデートに誘う口実作りや、彼女の友人を引き込む話術という形で。

「それに関してはホンマにスマンっちゅうか、高校時代のウチが鈍すぎてたまきが女の機微に敏感になってしもたんよな……。おかげで興味ない女の扱いまで上手く……」

「はっ。」

「おっと……」

「まあさておき、今でもだいたい鈍感な茜ちゃんが振り返って謝罪が出るくらい昔はひどかったんですか!？」

「おん?」

「おっと……」

互いに失言を呑み込み、場の空気を改める。

「睡眠薬にしても、アレ絶対あ言えば私が飲むとわかって言ってま

したよね」

「罨つちゅうのはな、罨てわかつとつても引つ掛からざるを得ーへんから罨なんやで」

「罨のために乙女の純情すら利用するのはさすがにどうかと思いますよー！」

「純情な乙女は意中の相手の茶に薬を盛ったりせえへんのよ」

既に飲食物に薬物混入はクリスマスマスとバレンタインと今回で三度目。さすがにもうお目溢しの上限についているということ、たまきとゆかりの厳命により茜が現物を没収。

なんだかんだで茜に対するゆかりの評価はどれだけ低く見積もつても「手段をちゃんと選べる子」程度には高いらしく、没収した物品を茜が悪用するということは考えていないようだ。

「茜さん、ここは停戦協定といきませんか？ この薬を茜さんが使ってくればたまきさんはなんの疑いもなく飲んでくれますし、そうしたらもちろん二人でたまきさんを頂けますよ」

「魅力的なお誘いなんやけど、それでたまきの寝込み襲ったら今度こそウチら破局どころか絶交なんよ。せやから悪いけどあかりちゃんだけ絶交されてもろて構へんかな？」

「構へんわけないでしょう！ 構いますよ！ たまきさんに絶交されたらそのまま絶命ですよー！」

ほなやめとこか、という短い言葉の中に、絶対にたまきを悪どい手から守り抜くという鉄の意志を感じ取ったあかりは、素直に次ぐセリフを呑み込んだ。

これ以上の下手を打てば、たまき云々以前になんだかんだ上手くいつている茜との友人関係が絶交への特急券を獲得してしまうことを、勘のいい彼女は本能的に感じ取っていたのである。

「そも、停戦協定なんてウチらの間に成立せえへんやろ。むしろウチら以外の誰がたまき狙ねろとんねん。そっちの方が知りたいわ」

「えっ、あー……それも確かに……。たまきさん、誰の目から見てもいい人だと思うんですけど、意外とそういう話は聞きませぬ……。そういう線引きしつかりしてそうですし……。」

「せやろ。あいつ自身が身内と思わん相手から好かれることなんてあらへんよ。逆に言えば、あかりちゃんには好かれても問題ないと思われてるくらいにはちゃんとあかりちゃんのこと大事にしてんねやで。せやからたまきを落とすんやったら正攻法でな？」

「ホントですか!?! わたしちゃんとたまきさんから好かれてるんですね!?! よかったー! なんだかんだ言っただけでそれなりに心配だったんですけど茜ちゃんが言うなら間違いないですね! ひやっほーう! 今日のご馳走作らなきや!」

「……ウチもしかして余計なこと言っただけか?」

その夜、やたらテンションの高いあかりと疲弊した茜を迎えられたたまきは、妙に豪勢な夕飯に訝しげな視線を向けながらも、茜の疲労ぶりがあかりを止めようとした努力の跡だと信じて食事をとり、普通に美味しい食事にありついてそのまま茜を抱えてリビングで眠り、翌朝に訪れた葵からド叱られたという。

退職へのカウントダウン

新年度となって大学のサークルメンバーが増え、あかりがサークルの合宿と称した旅行に向かって四日が経過した。友人の車で女子三人、三泊四日の車中泊とのことだが、その間の家事は当然ながらたまきに自炊を頼んでいた。

元々、姉が嫁いでいってからあかりが押しかけてくるまでの期間は一人暮らし状態であったし、そうでなくとも結月家は放任主義。少なくとも中学に上がる頃には、学費などの資金的な問題以外は基本的に自分のことは自分でどうにかしていた。

それには当然のことながら、自炊という意味も含んでいる。あかりも、時々であるものの、たまきの料理を食べたことはあるし、入浴前の風呂掃除も、ゴミの分別と捨てる曜日も理解している。

だからあかりは失念していたのである。あかりが不在の間は、当然ながらたまきは出勤中ずっと自宅の鍵をかけている状態。茜が入り浸るのは、およそ夕方あたりからで、たまきもあかりも不在であれば、彼女も結月家に侵入する理由はない。

入るとすると、それは彼が仕事を終えて帰宅する頃で、それなりに遅い時間になるし、彼の疲労もクライマックス。そんな相手に甘えたり絡んだりというのは、その明るさに反してとても思慮深い茜には憚られる行為であった。

故に、あかりも茜も気付くのが遅れた。というか、実質的に手遅れになった。

年度明け早々ということもあり、そこが地獄の入り口とも知らぬ新入社員の育成と称した退路の遮断。その影響で少しずつではあるが確実に後ろにズレ始める業務。ただでさえ足りない時間が後ろにズレることで普段以上に長くなる無給残業^{サービス}。

当然のように日付けを跨いでの帰宅。夜食にも等しい夕食は疲労と睡眠時間の確保のために削られ、社会人らしい清潔感をキープするためだけの入浴は浴槽に浸かる時間もなくシャワーで済まされ、気絶にも等しい睡眠は目を閉じた次の瞬間には朝になっているかのよう

で、疲れなど取れるはずもない。

朝食の時間を削ってギリギリまで布団の温かみを堪能すると、身支度・身嗜みを整えて出勤。同じ牢獄の中にいる生気のない仲間たちと、威張り散らすだけで的確な作業量の把握や管理すらできない無能な上司に対する怒りと殺意を共有することで団結し、共に使い道も使う時間もない金を稼ぐために仕事をこなす。

そんな生活を、実のところあかりがサークル合宿に行く一週間前から続けていた。あかりには「帰りが普段より遅くなる」以上のことは言っていないかった。朝食と夕食は出先でどうにかするとまで言って、その二つを抜いていたことなど同居人のあかりすらわからなければ、当然ながら茜も知ることはなかった。

そしてとうとう限界が来た。元々ひ弱な体力しか持ち合わせていないたまきは、体力の無さを持ち前の要領の良さで補うきらいがあった。決していい意味ではなく。普通ならどんなに要領が良くても体力を補うまでには至らないが、彼はそれが出来てしまった。だからこそ同僚たちから慕われ、業務が無意味が増えていく。

ただでさえ一人あたりに三人分以上の業務を押し付ける肥溜めのような会社ではあるが、普段の彼はそれらをなんだかんだ言いつつも毎日2時間の残業——20時に終えて、残業組と言う名の同部署全員の中ではやや早く帰宅していた。つまりは、彼の体力と体格を把握している同僚たちが「まあたまきなら」と思えるギリギリのラインで。

しかし実際は、彼の本来の作業スピードなら定時ギリギリで片付くものであった。が、彼は職場のよくない空気感や連帯感を入社後すぐを感じ取り、自分の体を休める意味も含め、敢えてその作業スピードを落としていた。だがいくらペースを落とし、他の社員よりやや早く帰宅したとしても、それが一年続けば疲労は溜まる。

たまきはずいぶん、自宅の玄関先で倒れたのだ。あかりが帰る四日目、出勤しようとした家を出た直後、不自然に開いた玄関ドアに挟まれて伏せている彼を見た茜は、もはや悲鳴すら出ないほどの焦燥に駆られ、ずん子に車を出してもらって最寄りのクリニックまで運んだ。

結果は当然ながら過労による睡眠不足と栄養失調。そして診察時

は眠っていたため判断はできなかったが、茜によって彼の仕事環境を聞いた医師によれば、精神状態も決して良くはないだろうと予想されるため、できれば近い内に転職あるいは退職することを勧められた。ただ、ブラック企業というものは往々にして「辞められない」ことが問題のひとつなのである。上司による圧力だけでなく、同じ環境で苦しむ同僚を見捨てて自分だけ楽になることへの罪悪感や、あるいは退職願を出しても受理しないなど、とにかく「来るもの拒まず去る者殺す」なのである。

医師もそれは予想していたようで「場合によっては心療内科で定期的なカウンセリングを受けつつ、適当なタイミングで診断書を書いてもらい、その写しを退職願と一緒に提出すれば引き止めに応じず辞められる」とアドバイスも受けた。茜が。

そして泥のように眠り続けている彼がいつ目を醒ますかもわからなかったため、茜とずん子は職場に休みの連絡を入れた後、彼を結月家まで運び、そしてたまきのスマホを借りて彼の職場へと事情の説明と欠勤の連絡を入れたところ——予想通りの罵詈雑言。事情の説明と今日中の出勤ができないことを伝えたと捨て台詞まで吐いて通話切断。

茜とずん子は激怒した。必ず、かの邪知暴虐のクソ上司からたまきから除かねばならぬと決意した。二人には、ブラック企業の業務内容がわからぬ。二人はたまきの友人である。ご近所付き合いから始まり、共に青春を過ごした仲間である。だから彼に降りかかる邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

「先生の話聞いた時はお仕事辞めるんはさすがに、とか思ってたけど……身内からとはいえ電話口で会ったこともない相手にこんなん言うヤツのところでたまき働かせるのどない思う?」

「たまきくんが心配してるのは同僚の人たちだと思うけど……。でも、こんな人のところで働かせて、挙句こんなボロボロになってるたまきくんを見ると……正直言って腸が煮えくり返るよね」

「……ゆかりさんに連絡しよか?」

「じゃあ私はイタコ姉さまに……」

結婚後、姉のゆかりがたまきに対して激甘になつてゐる旨はこれまでも何度か説明したが、ずん子がこの有事に自分で手を下さず姉を頼るといふのはどういふことかと思ふかもしれないが、そもそもずん子とご近所である以上、当然ながらたまきは彼女の姉と妹とも付き合ひがある。

そして、特に長女のイタコに関しては、東北姉妹がこの地に越してきた三年前から、弟のように可愛がられた。本人の談によれば、妹たちはそれはもう可愛いが、本音を言えば弟も欲しかった、という理由で、彼が茜を付き合ひ出した頃は「なんですんちゃんじゃないんですのー！」と言つて三日間たつぷり拗ねたほどである。

また、弟云々を抜きにしても割と波長が合うようで、基本的には三姉妹の中でもずん子と交流することの多いたまきであるが、イタコに對しては一種の悪友か、あるいは「少しめんどくさいけどどこぞぞという時には本気で頼れる近所のお姉さん」という印象を抱くくらいには慕つていたのである。

そして、彼女はアルバイトとはいへ『本物』のイタコである。如何に正当性があるとも物理的な報復が罪に問われる現代において、物理的・科学的な証拠の残らない手段というものは限られるが、たまきを弟の如く可愛がつてゐるせいで最近ちよつとゆかりさんに嫉妬すらされているイタコは、今こういう状況でとても頼りになる。

たまきが起きた時のため、二人は交互に『姉』への連絡を済ませると、しばらくしてあかりが帰宅した。

普段ならこの時間はあかり一人であるはずの家の鍵が開いていたため、最初はかなり警戒していたが、茜が玄関で立ち止まる彼女を迎えに行き、経緯とたまきの現状を説明したところ、今度は先ほどの警戒心を遥かに上回る殺気を放ちながら「刺しましょう」と微笑んだ。もちろん止めた。

止めはしたが、茜とずん子も気持ちはあかりと同じであつた。たまきへの恋心を抱く二人は当然のこと、ずん子とてたまきのこととは大事な友人として好ましく思つてゐるし、妹や姉の遊び相手としても東北家と打ち解けてゐる彼をこうもボロボロにされれば、いかに穏やかさ

を心掛けている少女の心にも鬼が宿ろうというもの。

「あの……ずん子ちゃん今日めちやくちや怖くないですか……？　ずん子ちゃんってたまきさんのこと……」

「いや、ずんちゃんはそういうのちやうねん……。シンプルやけど重度の『友達想い』なんよ……。こう、なんやろな……。マザコンとかシスコンとかあるやろ？　ずんちゃんの場合、その友達版の『フレコン』なんよ……」

「友達に激重感情向けすぎでは？」

「二人とも聞こえてるからね」

前の職場の末路と転職先

たまきが過労で倒れてから一カ月が経過した。それは同時に、彼が転職してほぼ一カ月が経過した、という意味でもある。

たまきはあの会社において、決して重要な役職ではなかった。むしろようやく勤務一年目、というところで辞めることになってしまったのは、彼にとっても惜しむところであった。

しかし、ブラック企業がなぜブラックと化すのか。それには様々な理由が存在するが、そのひとつに「利益を求めて過剰な業務を請け負ってしまうから」と言われている。

もう少し具体的に言えば「現時点での人員や設備で回しきれぬ時間や業務は限られているのに、それを超過した仕事を請け負って、それをこなして利益を得る」ということ。しかしそうすると、その「超過した時間や業務」はどう補うのか。

その解決法が「時間外労働」というわけだ。しかし、労働基準法で時間外労働の限度が決められているため、その限度を守っている体を見せるために、定時でタイムカードを押しして残業をする。そうすることで、少なくともデータ上では「定時で業務を終えた」ということになるのである。

この「時間外手当の出ない残業」というのが、いわゆる「サービス残業」というやつである。たまきを含む前職の職員の場合、1カ月に60時間を超える時間外労働＋夜間労働＋休日労働を本来支払うべきであるはずだが、これらを全て「定時退社した」と偽っているので、バツチリ違法ということになる。

しかし、こうしたブラック企業というものは明確な弱点があるのだ。それは職場において「役職を持つ者」ではなく、「場の空気を支えている者」が実質的な実権を持っているということ。

他よりもずば抜けて仕事ができるわけでもない。ほどほどの業務をこなし、周囲に気を配って積極的な対話を行い、同僚たちの不満や愚痴を聞いて相談に乗り、上司の理不尽から同僚たちを庇う「縁の下力持ち」がいなくなった時、その職場は崩壊する。

一カ月前、たまきが意識を取り戻したのは倒れてからまるつと一日が経ってからのことだった。気付いた時には姉のゆかりが知人伝いに知った弁護士を連れて職場に突撃し、たまきがこれまで受け取るはずだった賃金と実際に受け取った賃金の差額、そして彼を含め職場内の劣悪な環境を淡々と並べ、たまきの退職をもぎ取った。そしてその直後から、その職場には立て続けに不吉な出来事が起きた。

以前その職場を離れて転職した人物が取引先の重役になっており、それまで頼りにしていたパイプのひとつが途絶えたこと。

それまで会社にとって不利益となる情報を外部に漏らさないよう情報統制を行っていた重役の一人が身内の不幸で退職してしまったこと。

たまきの直属の上司が改めて彼に連絡をとろうとしたところ、間違つて親会社の重役に連絡を入れてしまい、例の高圧的な態度のまま電話越しの相手に怒鳴ってしまったこと。

様々な要因で会社の上層部がグラグラになっていたタイミングで、たまきの同僚たちが一斉退職。

前述の通り、職場において最も必要な人員というものは「有能な上司」ではなく、上司であれ部下であれ同僚であれ、場の空気を一定に保ちながら公的な距離を保ったまま個人に寄り添う「誠実な仲間」なのである。

単純に有能な人員が抜けたのであれば、それに次ぐ人員を補充すれば会社という大きな機械を動かす「歯車」としては問題ない。しかし、誠実な仲間を欠いた職場というものは、「オイルを欠いて錆びついた機械」と言えるだろう。必要なパーツは全て揃っているのに、業務が滞るだけでなく場の空気まで悪化するからだ。

結月たまきという人物は、前の職場において間違いなく「オイル」の役割を果たしていた。オイルを欠いて錆びついた機械を無理に動かそうとすれば、歯車の凹凸は脆くも崩れ、機械としての意味を果たせなくなる。

そうして一週間前、つまりたまきが離職して三週間後。前の職場は

すさまじい勢いで経営が崩壊し、閉業したと元同僚から聞かされた。そんなたまきが今現在、新たに採用されたのは――、

「いやあ、確かにブラックじゃなければどこでもいいとは言ったけれど、さすがにこれは予想できなかつたなあ」

「もうすぐ一カ月目なんだから、そろそろ慣れてくれよ」

「業務には慣れましたよ、業務には。ただ、職種が今までと全然違うので、雰囲気には慣れないですよ……」

ここは、姉の妻――つまりたまきにとつては義姉にあたる弦巻マキが所属する大手音楽プロダクション「VRミュージック」の一室。言ってしまうえば義姉の紹介コネでしがみついた職場ということもあり、最初の数日こそ同僚から恨みがましい目で見られたが、それもすぐに鳴りを潜めた。

元より、マキの手助けがあつたのは彼の紹介というところまでであつて、面接と実習は通常通り。今週末、ようやく実習期間を終えようというところで、加えて彼の人当たりのよさや物腰の柔らかさ、先輩を敬い上司を立てるところも功を奏し、今ではむしろ「可愛い新人」の立場を手に入れていた。

実習期間を終えれば、まずはまだ専属マネージャーがついていない数名の所属タレントの資料を先輩マネージャーと一緒に確認し、アドバイスを受けながら担当タレントを決めることになるが……。

「でも僕、あんまりテレビとか見ないから知らなかつたんですけど、義姉さんってすごい人だったんですね」

「オレからすると、むしろJAMバンドを知らない人がまだいて、挙句そいつがJAMメンバーの義弟で、挙句なんにも知らないままこの業界来ると方がびっくりだったよ」

「ここに就職してから義姉さんの活躍をネットで調べて知りましたよ……。バンドやってるとは聞いてたんですけど、単なる趣味なのかなって思つて」

「お前よくその認識でこの業界に入つてこれたな……」

今日は、いよいよ実習期間が終盤に差し掛かるということで、通常業務ではなく現場での立ち回りやトラブルの対応に関する説明を受

けている。

そも、たまきは記憶力にはそれなり以上の自身があるので、手にしたメモを活用する場面は多くないだろうが、それでもブラック時代と比べて遥かに有用な知識や経験則を先輩から直々に聞けるというのは新鮮であつたし、新人としてはポーズだけでもメモを取る姿勢というのは好まれる。

加えて、メモは手元に残る資料であるため、隙間の時間に反復したり、質疑を考えることもできる。暗記で不安になる場面はあれども、メモが邪魔になる場面などそうそうないのだ。

たまきの指導を自ら買ってくれたこの先輩は、マキがこの事務所に所属したばかりの頃の担当マネージャーで、主にタレントが新人から中堅になるまでの最も不安定な期間を中心的に担当しているベテランだという。

そのため、既に中堅以上のタレントたちからは篤い信頼関係で結ばれているし、たまきのような新人マネージャーの教育にも精力的で、彼を紹介してくれた上司からは「ひとつの事務所に一人は欲しいような理想的な社員」と太鼓判を押されていた。

そのせいでたまに引き抜かれそうになっているところを見かけた時は気が気でないらしいが。

先輩が現在担当しているタレントは、まだデビューまで漕ぎつけていない下積み期間。まだオリジナルの曲すらなく、タレントにとって最もつらい時期であるが、先輩は「問題はこの時期ではなく、この時期を乗り越えた直後だ」と言う。

「いいか、今の時期を乗り越えて正式にデビューが決定したら、当然ながら今までとは比較にならない数のメディアに露出することになる」「そうですね」

「そうなると、当然と言っちゃなんだがタレントはこれまでの苦労が報われた気がして、少しだけ気が大きくなりがちだ。それ自体は仕方のないことだし、彼ら彼女らの努力が実った結果として多少は目を瞑ってやりたい気にもなるが、それをぐっと堪えて諫めてやらなきやいけない」

「天狗になる前に鼻っ柱を折れってことですか？」

「いや、そこが難しい。そこまでの苦難を越えた報酬はあつて然るべきだ。だが、度を越しちやいけない。だいたい新人マネージャーは、この「程度」を間違えてタレントを潰しちまう。だから俺は社長に何度か「新人マネージャーは新人タレントを担当するべきじゃない」って何度か進言してるんだが……まあ、それは未だに叶ってない」
下積みの苦勞を乗り越えてデビューした後。それは「メディアへの露出」という明確な結果として、タレントに自信と慢心を与える。この時期のマネージャーの最大の『役目』は、この「自信」を保たせながら「慢心」を取り除くことだと先輩は言うが、これにはたまきもメモを走るペンが鈍った。

理屈としては理解できる。言っていることも正しい。だが、問題はそのため的手段だ。「適切な言葉選び」「与えるべき仕事の選定」「交流タレントや関係者との良好なコネクション」これらをひとまとめにしてしまえば、「タレントのメンタルとフィジカルと環境の正しい管理」という、マネージャーとして最も基本的な部分に戻る。

だが先輩の話聞く限り、多くの新人マネージャーはこの「最も基本的な部分」を形にするまでに、多くのタレントを潰してしまうのだという。先輩は何度かそうなる直前でケアを入れて立て直した者もいたようだが、そうでないタレントは数えきれないとのこと。

「僕はやはり、新人タレントを担当することになるんですか？」

「そうだな。俺としては、既にある程度のことを自己管理できてるベテランタレントにノウハウを積ませてもらってから、新人を担当するべきだと思うんだが……良くも悪くも社長はタレントの意見を優先しがちでな。当然、ベテランタレントにはそこに至るまで寄り添い続けたマネージャーがいて、信頼関係も出来上がってる。そうなる……な？」

「ああ……担当の子としては、マネージャーを没収された挙句に新人マネージャーの面倒も見なきゃならなくなりますからね……。そうになると、新人に新人をぶつけて1から信頼関係を築いていけ、というのは間違いではないようにも思えますけど……それってタレント側

からするとギャンブルじゃないですか？」

「だな」

新人マネージャーが新人タレントを持てば、先輩の言う「デビュー直後の問題」をクリアできない場合がほとんどだという。あるいは、デビューまで漕ぎつけることすらできずに潰れる者さえ少なくはない。

それを何度も繰り返してマネージャーが自分の中の「正解」を見つけ出すのだが、そうしてようやく「正解」を見つけたマネージャーは担当と共にデビュー直後を乗り越え、そのまましばらくはそのタレントにかかりきりとなり、実質的な専属マネージャーになってしまう。

マネージャーとタレントの比率はどうしても後者が多くなりがちだ。だからこそ、この事務所ではほとんどの場合において「専属」という概念は存在しない。あくまで「マネージャーが請け負える限界が一人まで（実質的な専属）の頃がある」というだけで。

故に、新人タレントからすれば「新人マネージャーが「正解」を見つけて出してから「実質的な専属マネージャー」を持つまで」という、まさしく一瞬の幸運を掴み取るしかないのである。

そうした「幸運を掴み取れなかった新人タレント」を少しでも減らすために、この先輩は敢えて新人から中堅までの期間を重点的に担当するベテランマネージャーであろうと今の立場を保ち続けているし、十分に育ったタレントは信頼できる次のマネージャーへと引き継いでいるのだとか。

「先輩、タレントから随分と惜しまれているんじゃないですか？ 中には、先輩に情を寄せていた子もいたんじゃない？」

「まあ、個人の体を気遣い、心を保ち、環境を整えるって仕事だからな。言ってしまうえば「担当の子にとって理想的なケアができる人間」なんだから、そりやそういうことを言われたこともあるけど、担当はあくまで一人前になるまで育成する対象であって、息子や娘みたいなもんだ。そういう気は起きないよ」

「そんなものですか？」

「ああ。なんだ、お前まさか担当するタレントから特別な目で見られ

「たいのか？」

「いいえ、僕これでもプライベートで好きな子いるので」

なら大丈夫そうだな、と言いながら肩を叩く先輩の豪快な笑みは、これから先のたまきの進むべき道を照らす太陽のようであった。

その豊富なバストはアウエーサイドであった

新しい職場は随分と働きやすくて、自宅に持ち帰る案件もゼロではないものの、定時・休日がきちんとして守られているだけで、たまきにとっては楽園のようであった。

とはいえ、先輩から紹介された担当は新人らしいじゃや馬ぶりを見せていて、こここのところ彼は自宅でも自室に籠ることが増えた。それが実質的な強制時間外労働であった前職と違って、彼の自主的な行いだというだけで、あかりも茜もある程度は微笑みと共に容認していたわけだが――。

(来週のスケジュール、こここの時間のボイスレッスンをもう少し短縮してミーティングにしようかな。僕も含めてまだ不安の残る業界ではあるし、心のケアは少し多めに時間を割いた方がいいかもしれない――)

「たまきさんっ！ せっかくの休日！ しかもこんなにいい天気なのに部屋に籠ってどうするんですか！ それにカーテンも閉めたまま……いや、もしかしてこれはアレですか？ わたしがこの薄暗い部屋に来ることを見越して……そう思えば確かに心なしかベッドもシーツにしわひとつない気がします！ これは合意とみてよろしいですね!？」

「よろしくないよ」

「なあーんですかあー!」

ドアを破壊せんとはばかりの勢いで突入を敢行した同居人の熱情をさらりと受け流しながら、たまきは部屋のカーテンを開けた。別に徹夜したわけでもなく、空が暗いうちから目が覚めたというわけでもないが、それでもこうして机と向き合った時は日が昇るか否かという時だったはず。

気付けば太陽はもう少しでテッペンに昇ろうかという様子で、時計を見れば短針はほとんど「11」に触れかけている。作業を始めた頃はあくまで1、2時間ほど予定表と向き合うだけのつもりだっただけに、これにはさすがに驚愕以上の呆れを抱いた。誰にではなく、自分

自身に。

未だにぶつぶつと文句を垂らすあかりを連れて一階に降りると、リビングでは既に当たり前の光景であるかのようには茜がせんべい片手にテレビを見ていた。とはいえ、休日昼間にやっている番組などほとんど面白味のあるものなどあるわけでもなく、茜が見ているのはたまきが録画した深夜ドラマだった。

「おっ、やっと起きてきたんか。おはようさん」

「おはよう茜。まあ出てこなかっただけで、実際は4時過ぎくらいから起きてたんだけどね」

「ほんなら早よ出てきてほしかったなあ」

「ごめんごめん、と軽く謝ると、冷蔵庫から麦茶を出してそれをコップに注ぎ、ラップのかかった朝食と向き合った。

朝食をこんなにもゆつたりとれる朝というのも、そんなに多くはなかった。未だに真っ白というほど真っ白な職場ではないが、それでも絶対にブラックではない。白く見えつつもうつすら暗みが差す仕事など、世間にいくらでもある。そう考えれば、十分に「まっとうな」仕事だろうとたまきは一息ついた。

それでも、ここのところずつと仕事にかまけて二人と遊んでいられなかったことについては平謝り以外の選択肢はない。

特に同居人のあかりに対しては、同じ屋根の下に暮らしているからこそ互いの意思疎通がうまくいかない時期もあっただろうが、彼女はそれを呑み込んでいつものままの態度で接してくれていた。それについては、たまきも素直に頭を下げないわけにはいかなかった。

ただ、素直に礼を言う「じゃあ」と言つて「じゃあ」では済まされない見返りを要求されることもわかっている。お礼は言葉ではなく何かしらの形や態度で示さざるをえないのだが。

「ごちそうさま。朝ごはんおいしかったよ、いつもありがとうね、あかりちゃん」

「いえいえ！ たまきさんの奥さんならば当然の務めですよ！」

「だったらなおさら当然の務めじゃないのにありがとうね」

「いえいえ！ ……あれ、もしかしてしれつと訂正されましたか今？」

今日はパン食だったこともあって、さほど多くもない洗い物を済ませようとすると、「それも奥さんの仕事ですよ！」と言つてあかりが率先して皿洗いを引き受けてくれたので、たまきは手を洗つてリビングへと向かった。

するとそこには既に茜の姿はなかった。食事中、少なくとも玄関の方から音はしなかった。ということは、葵に連れて行かれたというわけではない。少なくとも家の外に出たわけではないと思ひ、そのままソファアに横になりながらスマホのスケジュール帳を確認する。

向こう一か月分のスケジュールはみっちり……というわけではなく、むしろ自主的に入れた営業が大半を占めていた。担当の子は元々、インターネット上で個人的なアイドル活動をしていた経緯もあつて機材・施設の利用に慣れがあるとはいへ、プロのアイドルとしては駆け出しであるため、最初から仕事が多いわけではない。

あくまで地盤が他のアーティストよりも出来上がった状態でスタートを切れているというだけで、その地盤も全てがこちらの業界と同じ基準のもと「出来上がっている」とは言い難い。何より、今の子に求められているのは「アイドル性」ではなく「アーティスト性」なのである。

（彼女のネット活動には全て目を通した。初期の活動には手探りゆえの危うさもあつたけど、二年間ほとんど休みなく活動し、プロに移行する直前にもなると「アイドル路線」としてややバラエティ側に寄りつつも正統派なものになってたし、僕がやらかさなければきっと大成できる子なんだ。がんばろう……!）

今までのように強いられた労働ではないのに、どうしてか隙あらばこうして担当のことが脳裏をちらつく。トイレから戻った茜がしれっと同じソファアに転がりたまきの懐に入っていることに気付きもせず、洗い物を終えたあかりがソファアの上からたまきの頬をぷにぷにしていることなど知りもせず。

意識をようやく現実に取り引きずり起こしてきた時には懐の茜はぐつすり夢の世界に旅立っていたし、あかりもソファアの肘掛けに腕枕をしながらすやすやすと寝息を立てている。

「……僕もちよつと寝よ」

この後に起きる混乱と混沌を想像もしないままに、たまきもまた無防備な寝顔で意識を手放した。



ぴんぽーん、というチャイムの音が、三人のアラームとなった。

結月家では基本的に茜を引き取りに葵が来ることもあるので、鍵をかける習慣がない。というか、近所の人たちの理解や協力もあつて、この辺り一帯のセキュリティは都会と比べるとやや緩め。となると、相手によつてはそのまま入ってくるかもしれないし、そうなるこの光景はあまりにも爛れているように見える。

まずあかりが玄関に向かい、その間に茜がたまきからどいて、二人であくびを噛み殺しながらやや遅れて玄関へと向かった。

「どうぞ上がってくださいーい」

「では、おじやまします。あつ、たまきお兄さんこんにちはー」

「ん？ ああ、きりたんか。こんにちは。何かお勉強でわからないところでも——」

「ま……マネちゃん……？？」

「……えっ？？」

そんなバカな、と思いつつも、ここ最近ほとんど毎日聞いているその声を聞き間違はずもない。たまきはゆつくりとその声を辿っていくと、見紛いような巨大な帽子が疑いを確信に変えた。

「う、ウナちゃん……どうして君がここに——ツ!？」

「どどどどういうことですかたまきさん！ きりたんはご近所さんだしわかりますけど、いくらわたしのおっぱいが大きくて好みじゃないからつてとうとう小学生に手を出したんですか!?! さすがにそれはまずいとかいうレベルじゃないですよ自首しましょう自首！ わたしもちゃんと付き添いますからー!」

「……………」

「ちよちよちよストップ！ 止まったれあかりちゃん！ それ以上た

まき振り回したら死んでまう！ よお見い、もう意識飛んで……つて止まれ言うとるやろこのぼんこつウー！」

阿鼻叫喚となる年上組の様子を見守る小学生コンビは意外にも冷静で、互いに状況と情報のすり合わせを行っていた。

「えつと、ウナちゃんはお兄さんと知り合いなんですか？」

「う、うん……。ほら、ウナ最近ちゃんとした事務所で音楽活動始めたでしょ？　そこでウナのことを担当してくれてるマネージャーさんが、あのもみくちやにされてる人。ていうか、とーほくこそマネちゃんど知り合いなの？」

「はい。三年前にここに引越してきてからご近所さんとしてお世話になりましたし、ずん姉さまの学生時代の同級生ということもあって、割と親しくさせてもらってます。ほら、さつき話した勉強とか教えてくれるお兄さんですよ」

「……とーほくもしかしてマネちゃん狙いなの？」

「いや別に。というかお兄さん好きな人いますから」

こそそと喋る内容は問題の三人の耳には届いていないようで、このままでは埒が明かないと茜に声をかけた。なぜあかりではなく茜なのかは、小学生の意外に鋭い観察眼によるものだろう。

「えつと、お兄さんに宿題を見てもらおうと思ってたんですけど、お兄さん生きてますか？」

「いやアカンわ。こらしばらくは死んだるやろなあ。まあ30分もしたら目え覚ますやろうし、きりたんとそっちの子……」

「あ、音街ウナっていいいます。そっちのお兄さんには、仕事でお世話になつてて……」

「ウナちゃんな。ほな二人ともウチと一緒にゲームしながらたまきが目え覚ますまで待つてよか？」

「あの、あつちで額を押さえてるお姉さんは……」

「無視してええで」

茜の頭突きで沈んだあかりを後目に、トランプをしながらたまきの復帰を待った。

一時間後、当然ながらたまきは全員から各々の人間関係を説明さ

せられることになる。

成人男性が教える女子中学生の楽しい勉強会

「お兄さん、ここ何回やっても答えと合わないんですけど……」

「うーん……計算は合ってるね。なんでかな……ああ、文章の読み取りミスだね。もう一度ちゃんと文章を読み込んでから解いてごらん」
「マネちゃん、こつちも教えて」

「えーつと……式はこれでいいね。単純な計算ミスだから、このあたりから計算し直したら大丈夫だと思うよ。頑張って」

たまきが目を覚ますと、ひとまず全員の紹介を済ませたあと、中学生組の勉強会が結月家のリビングで行われた。

ゲームにせよDVDにせよ、それなりに誘惑の多い部屋ではあるものの、二人の集中力は大したもので、シャープペンシルを手にすると同時にその意識は宿題へと向けられた。

時折たまきにアドバイスを求めることはあれども、基本的には各々の力で問題を解いていることも、彼女らの真面目さが窺える。

「ああしてるのを見ると、たまきさんって教え上手なんですな」
「ん？ ああ、せやな。まあ学生時代も下級生に勉強教えとったし、そら上手いやろ」

たまきの教え方は、手段だけ聞けばとてもシンプルだ。教わる側がわからない問題・回答・正答を全て確認し、どこでズレが生じたのかを見つけ出し、そこを指摘してやり直させるだけ。

幸いなことに、きりたんもウナも根が真面目で素直であるため、たまきが間違った場所を指摘すればそこから自力で解くことができている。だが誰もがこう容易く指摘を受け入れてくれるわけではない。

なぜならこのやり方は、教える側が教わる側の「解く力」を把握していなければ成立しないからだ。単純に間違った場所を教えるだけで解決を図れるのか、あるいは間違っている場所と、どう解けば正解に辿り着けるのかを説明した方が良いのか。そこを測り損ねれば、教わる側から返ってくるのは反感だ。

相手の性格や実力に合わせた教え方というのは、そうした変化に敏感なたまきだからこそ得意とするやり方であって、誰にでもできる手

法ではない。

そもそも勉強を「教える」というのは単純に答えと解き方がわかっていたらいいというわけでもない。自分が把握しているものを自分なりに理解にする「理解力」「判断力」と、それを噛み砕いて相手に伝える「伝達力」が備わっていないければ、教科書に書いてある通りのことしか教えられない。

となれば、教わる側からの評価はシンプルで、「教科書を見とけばいい」という身も蓋もない事実だけを突きつけられるだろう。

「茜、あかりちゃんと一緒にアイス買ってきてくれる？ 二人とももうすぐ終わりそうだから、ご褒美のおやつにしよう」

「ええけど、あかりちゃんもか？ こない暑いのに連れ回すんはさすがに気が引け——」

「茜がいなかったら絶対ゲームしたり僕に話しかけてきたりで勉強の邪魔しかしないから」

「あかりちゃん。何そっぽ向いて寝とんねん。起きとるやろ。はよ支度しいや」

うえー、と言って茜に引きずられながらリビングを去っていくあかりを視界にすら収めず、たまきは二人の宿題をこなす様子を教科書片手に見ていた。

（懐かしいな。高校時代、いつもの四人でよく集まってこうやって勉強してたな……。たまに集中力が切れて騒いで姉さんに「勉強会なら静かにやってください」って怒られたりもしたけど……。それも含めて、本当にいい思い出……）



「終わったあー！ マネちゃんマネちゃん！ これでどうー！」

「ん、見せてもらうね。……うん……うん……うん、うん。いいね、全部正解。これで今日やる分の宿題は終わりかな。よく頑張ったね」

「よっしゃー！ で、とーほくはもう終わったのか？」

茜とあかりが家を出て30分ほどして、きりたんよりやや遅れてウ

ナの宿題が片付いた。

時間で言えばウナの方が遅れているわけだが、解く速度は圧倒的に彼女が上だったのは、先に宿題をカバンの中へとしまい込んだきりた人もよくわかっていた。

「そうですね、15分くらい前に。まあウナちゃんと違って普段から宿題やってるので、学業以外にもやることのあるウナちゃんが遅れるのは仕方ないですよ」

「うーん、やっぱり事務所でも隙間の時間とかで宿題とかやらせてあげた方がいい気がしてきた。貴重な空き時間はできるだけ休ませてあげたいけれど、そのせいで学業が疎かになるのはよくないし……」

ウナは学業と同時に音楽活動に勤しんでいる関係上、どうしても学校の課題を溜め込みがちだ。本来ならそうしたケアも事務所側で何か手段を講じるべきなのだろうが、VRミュージックは大手事務所である割にそういった手回しが行き届いていない。

彼女の他にも未成年アーティストは数多く所属しているものの、学業のケアは各々で行うか、担当マネージャーが自主的にサポートしていることもあるという。たまきとしても、これまでウナの学業事情にどこまで口を出すべきか思案していたが、今回の勉強会で決心がついた。

なぜならウナのこなした宿題の数は、きりたんのこなしていたものの2.5倍近いものだったからだ。勉強をしている時のウナも、勉強が嫌いというわけではなさそうだった。むしろ、解き方を教えればスラスラとペンを走らせていく様子は、彼女の地頭の良さが垣間見えた。

「今度のミーティングで、空き時間をもう一度ちゃんと見直そう。体調と相談しながらっていうのはもちろんだけど、勉強できそうな時間があれば少しでもこなした方がいいと思う。僕も出来る限りサポートする」

「うえー……。今日みたいにみんなとやる勉強会みたいなのはいいけど、一人でやる宿題なんてつままないよー!」

「ここまで、ほとんど勉強に抵抗を見せなかったウナが、初めて泣き

言を洩らした。

だがそこでようやく、たまきはなるほどと合点がいった。いくら他の子よりも早く社会に出てキレイなだけじゃない大人にも接しているからといって、中学生であるはずのウナがどうしてこんなにも素直に勉強を受け入れていたのか。

彼女が真面目に取り組んでいたのは「勉強」ではなく、親しい友人やその知り合いたちに見守られながら勉強ができる「勉強会」だったのだ。学校での様子はたまきには知る由もないが、このウナの言動を見て驚きも見せず「土日ならビデオ通話くらい付き合いますよ」と言うきりたんを見るに、これが彼女の素顔なのだろう。

「じゃあ先輩に相談して、他にも同じような問題を抱える子たちも集めて定期的に事務所勉強会ができないか聞いてみるよ。学業に関するトラブルをケアできるなら、事務所としてもNGは出さないと思うし」

「わたしも、ウナちゃんと仲のいい友達とかに声かけてみますよ。さつきも言いましたけど、土日なら勉強する様子をビデオ通話で繋ぐだけで解決する問題っぽいですし」

ウナの学業状況を鑑みて、彼女のマネージャーであるたまきだけでなくきりたんもまた、彼女なりに友人の手助けをしようと手を貸してくれる。

ある程度はビジネスも絡むたまきと違って、きりたんの言葉は完全に彼女の善意によるものだ。元々、学校でのきりたんは遠巻きに可愛がられる存在で、自分からも周囲からも積極的に絡むのはウナくらいであった。だからこそ、きりたんはなんだかんだ言いながらウナを突き放さないし、彼女が本気で困っている状況について手を貸してしまう。

しかしそれは同時に、積極的に他者に接しない環境を苦としないタイプのきりたんが、ウナのために自ら他者に接しようとしているということ。それがきりたんにとって良い影響を与えるものにせよ、そうでない影響を与えるにせよ、彼女がウナのために「他者との交流」を持つとうとしたことは、両者の友人関係に何かしらの影響をもたらす。

「お、遅れましたー……」

「やつと帰ってきた。二人ともどうし……うわ、何そのドロドロ」

「アイス買うとこまでは良かったんやけど、帰りに坂の下のおばちゃんに会ってもうて……」

「話が！ 長い!! です!!!」

一人、状況を呑み込めないでいるウナを差し置いて、この近隣に住む彼女以外の全員が苦笑いを浮かべていた。

ちなみに坂の下のおばちゃん、というのはこのあたりの団地の坂を下り切ったところにあるアパートの管理人をしていることからつけられたあだ名で、他にも数軒の民家があるもの、「坂の下のおばちゃん」と言えば、人柄は悪くないが話が長い上にループを繰り返すその人物を指す。

「そんなに長いのか？」

「この炎天下とはいえ、あのアイスを見て何も思わないんですか？」

「……帰り道がちよつと不安になってきた」

「今日来たみたいの前に渡した地図を頼りに来れば出くわさないんで大丈夫ですよ」

「とーほくイケメンすぎじゃない？ 大丈夫？ 明日もしかして雪降

らない？」

「今7月ですよ」

翌日、雪は降らなかつたがゲリラ豪雨には見舞われた。

奪い続けた果てに残ったもの

夏という日が長いイメージがあるが、実際に人々が「夏」と言われて想像する7・8月というのは、夏至もとうに過ぎて日の沈みが早まる頃合い。それが8月末ともなれば、ヒグラシの鳴き声に寂しささえ覚える。

それでも、人というのは「楽しいこと」に対して極めて貪欲で、四季の移ろいなど気にも留めずに「暑いうちは夏」と称して、楽しい予定を詰め込められるだけ詰め込んで、そして全てが終わる頃になって後悔する、というのを毎年繰り返すのだ。

「海いきましよう」

「楽しんできてね」

「たまきさんも行くんですよ!」

「僕もいくの? 8月の太陽に照らされて焼けるような砂の上を歩いて有毒なクラゲとかヒトデがないと断言できない海に?」

「今日はカードゲームにしましょうか。わたし新しいの組んだんですよ」

たまきの虚弱ぶりは、彼の周囲にいる誰もが知るところ。それは茜やずん子などの親しい間柄の友人だけに留まらず、この街に住まう者で知らない者はいないだろう。街を一人で歩いていると、地元の子供たちに心配されるほどだ。

自分の脆弱な肉体を何度恨んだだろう。たまきは、親しい相手がその親しさを深めるほどに、その相手の「楽しさ」を奪い続けてきた。自分の弱さが、親しい相手の「楽しさ」に耐えられないからだ。

「先に帯で後ろどけるね。何もなければオーガを強制脱出させて、全員で総攻撃。合計は9100だけど、手札から何かあれば使つていいよ」

「たいありでした!」

今こうしてゾンビの群れに襲われてゲームオーバーとなったあたりであるが、普段はなあなあに受け流している彼女の好意には、口にはしないが救われている部分があるのは、敢えて言う必要があるだろう

うか。

可愛げのある童顔に、小柄で細身の体躯は、笑顔を絶やさず柔らかい言葉と態度で接していれば、彼に対しても好意的に接してくれる者は大勢いた。それでも、学生時代から今に至るまで付き合いのある者は決して多くない。

それは決して彼が望んだからではない。むしろ友達は多ければ多いほど喜ぶ程度には、彼は「陽」の感性を持っているのだ。しかし、それを拒絶したのもまた自分だった。自分——その「意思」ではなく「体」が、友との交流を拒絶した。

最初のうちは、ただ会話を交わすだけで楽しさを共有できる。しかし親しさを深めていけば、いずれその行動範囲というものも自然と広がっていく。その広がりきった行動範囲に、彼の体はついていけず、どうしても断らざるをえない機会が増えるうち——その交流は自然と途絶えた。

そんなことが一度や二度ではなく、これまでの彼の人生において幾度となく繰り返された。そしてそのたびに、彼は親しいと思った相手を失い続け、体以上に精神が摩耗した。

「もう一回！ もう一回やりましょう！ 今度こそ勝ちますから！」

「前は僕の10戦8勝2敗だったし、今回は全勝したいねえ」

「ふふん、ここから勝率を逆転させてあげますよ！」

アウトドアが嫌いなわけではない。もしも自分に体力があるのなら、バイクの免許をとってツーリングやキャンプをしたいと思ったことももあるし、川沿いを歩けば釣りをしたいと思うこともある。けれど、それらは全て夢に散った。

ある人は、体力がないのなら鍛えればいいだけなのではないかと言った。またある人は、食生活を整えればどうにかなるのではないかと。だがそれらを含めて、自分の肉体を健康的なそれにしようとする試みは、他の誰でもなくなたまき自身が真っ先にやって、挫折していた。

体を鍛えるためには、適度に体をいじめて適度に体を休めなければならぬ。だが、彼は自分の体をいじめる腕力も体力もない。食生活を整えるためには、現在のそれを見つめなおして、栄養バランスや食

事量の改善をしなければならぬ。だが、彼の食生活はすでに量もバランスも理想的なものであった。

とにかく、誰が何を言っても彼自身がどうやっても、その「虚弱」を打ち消すことはできなかった。

それでも、そんな彼を見捨てなかつたのが茜であり、ずん子であり……葵であった。彼女たちはいつでもその「虚弱」を理由に彼を責めることも、彼を避けることも、彼から離れていくこともなかつた。

ただ、彼が彼のままでも自分たちと同じ「楽しさ」を共有できる方法をずっと考えていてくれた。そして、その手間を彼のせいにはしなかつた。ただ「自分たちが」たまきと一緒に楽しい時間を過ごしたいだけだと言ってくれた。

だからたまきは——茜とずん子にはもちろん、葵のことも「親友」だと言つて憚らない。そしてそんな彼女たちと同じように、目の前の少女もまた「たまきと一緒に楽しい時間を過ごす」ための方法を考えて、そしてそのために手間と時間を費やしてくれる。

「んー？ これ効かないんですか？ ……あ、効くけど戻ってくるんですね。じゃあ……あつ！ これでどうですか！ まずこれ使つてコブラとベアを復帰させて、そこから——」

「ふんふん……うわ、こつちの盤面が崩れないのわかつた上で普通にライフを削り殺しにきたね。あ……あ……こりやダメだ。どうにもなんない」

「やったー！ これで1勝1敗ですね！ ここから巻き返しますよー！」

「二人とも邪魔すんでー。おつ、今日はカードやつとるんか。ウチも家から持つてきて混ぜさせてええ？」

「いいですねー。負けるたびに調整を待ってもらうの申し訳なかつたんで、交代相手ほしかつたんですよー」

ほなちよいまちー、と言つてたつた今入つてきた道に戻つていく茜を見送ると、それから10分もしない内に大小2つのケースを持って戻つてきた彼女は、さも当然であるかのようにたまきの隣の席に座つて観戦をはじめた。

「この子であかりちゃんのスコープを殴るよ」

「うーん、やっぱ防御札とかも増やした方がいいんですかね……」

「さすがに結果論やない？」

三人で集まってわちやわちやと笑顔をごぼすこの時間がいつまで続くかはわからない。いつまでも続くような気もするし、たつた一度の瞬きをしただけで崩れるような気もする。

今、この二人をこの場に繋ぎとめているのが自分でなければ、あるいは今よりももっと「楽しい」時間を彼女らは過ごせたのかもしれないと、よくない考えが脳裏にチラつく。けれど、そんなチラチラと目障りなイメージが彼の視界を遮ることは決してないのだということも同時に確信する。

なぜなら——今こうして目の前で微笑む二人は、他の誰でもなく結月たまき「自分」の前でその笑顔を見せているのだから。

「ほな次はウチやな！ あかりちゃんみたいにはいかへんよー」

「割と冗談抜きに茜の方が勝率いいから笑って流せないのがなあ……」

「わたしの仇を討ってください茜ちゃん！」

しかし、今こうしてふんすふんすと息を荒くしながら茜を応援しているあかりを見れば、たまきが繋ぎとめたこの二人の縁もまた、たまきがいなくても繋がり続けているのだろう。

事実、たまきが仕事に出ている間のことを考えれば、ここ最近ではあかりの方が茜と接している時間は長いのかもしれない。そう思えば、むしろたまきの方があかりに嫉妬の気持ちすら抱くほどだ。

「——ん？ あれ、もうこんな時間じゃん。この対戦でキリにしよっか」

「うわ、お外けっこう暗っ……。だいぶ日が早くなりましたね……」
「夏とはいっても8月ももう少しで終わりだからねえ。一部の学生たちの悲鳴が聞こえてくるかのようだよ」

「ウチらのクラスは割と真面目なんが多かったんやけど、隣のクラスの男子とかは新学期によお担任に雷落とされとったな……」

懐かしむように語る二人を見て、今度はあかりがたまきの過去をよ

く知る茜に嫉妬するターンに回った。

「茜ちゃん関西弁なのに真面目キヤラだったんですか？」

「いや関西弁なんも関係あらへんし「だった」ってなんで過去形やねん。今も真面目やろ。少なくともあかりちゃんよりは」

「失礼な、わたしだって真面目な時はちやんと真面目ですよ！ 家事に育児にたまきさんのシモのお世話に全部しっかりこなしてます！」

「家事以外は嘘だから信じないでね茜」

「信じるわけないやん」

はよヨリ戻せとキレる妹

近年、温暖化の影響で季節の乱れが嘆かれる我が日本では、今年はどういうわけか例年よりもやや早く残暑を終え、人々が夏の終わりを受け入れていた。

夏が終われば、秋が来る。秋のはじまりは、学生時代から毎年のように続けてきた「結月家・琴葉家・東北家合同ピクニック」が行われる。結月家の両親が亡くなった昨年はさすがに中止したが、今年からは再開するつもりで、各家庭どこもテンションが上がっているという。

ただひとつ、心配の種があるとすれば……。

「明日のピクニック、どうしようね……」

「せやな、最近もう普通に受け入れとったから忘れとったわ……」

「そういえばうちも親にはまだ何も言ってなかったかも……」

「普通に事実を言っちゃえばいいんじゃないですか？」

頭を抱えるたまき・茜・ずん子を横目に、当事者でありながら呑気にせんべいを齧っているのが、今回の議題であるあかりだ。

実は昨年のピクニックを中止したのと、あかりが結月家に押し付けてきたタイミングの問題で、この家にちよくちよく顔を出しているあかりやずん子はともかく、その親たちにはあかりの説明を一切していなかったことに気付いたのである。

これの何が問題かといえば、たまきと茜が互いの了承の上で別れたのが、ちょうどあかりが結月家に来る一カ月前のこと、なんの事情も知らない琴葉家からすると「たまきがうちの娘をフツて付き合い始めた女」であり、東北家からすると「たまきがうちの娘を選ばず付き合った女と別れてすぐに作った新しい女」なのである。

いや東北家に関しては向こうが勝手に「うちの娘とも仲いいだろう、琴葉さんとかみたいに浮いた話みたいなのはないのか」と言っていただけで、仮にそれに乗っていたら一瞬で両家公認二股野郎だったのである。あとそもそもたまきとずん子にその気がない。

「現状、一番身の危険が迫ってるのキミなんだからもう少し緊張感

もったほうがいいよ」

「え、わたしなんですか？ たまきさんが茜さんと別れてすぐ新しい女作ったと思われてるなら怒られるのたまきさんでは？」

「あのねあかりちゃん、たまきくんは私たちがここに越してきてからずっとお世話になっていた人の息子さんで、身体が弱いこと以外はとにかく真面目で勤勉で気遣いのできる男の子だって、私たちの両親だけじゃなくこのあたりの地域の人みんなから可愛がられてるの」

「うちらが別れることになった時も、まず最初に「たまき君に何したの？」ってウチが疑われたくらいや。そんでお互いの了承の上で別れたちゅう話は琴葉家と東北家どっちも共通認識なんよ。で、その次の月にこの家に押しかけてきたんがあかりちゃんや」

「やばいじゃないですか」

やばいんだよ、というたまきのオウム返しに、全員が沈黙した。

この地域でのたまきに対する好感度が軒並み高いせいで、比例するかのようにあかりに対するあたりが強くなる未来がその場の全員に共有された。

さすがに子供同士の問題に親たちが出張するようなレベルの面倒事は起きないかもしれないが、それでも——特に琴葉家においては、語気が穏やかでいられないだろう。

「二応、みんなで事情の説明とかはしておくから、あかりちゃんはいつもみたいにガツツリ僕に絡んでくるのやめてね。庇いきれなくなるから」

「そんな……！ わたしのために身を粉にして庇ってくれるなんて完全に物語のヒーローとヒロインじゃないですか！ これはもう宿屋でベッドインの流れですよ！」

「庇うのやめてええんちゃう？」

「あかりちゃん、そういうとこだよ」

本人のやらかしについては都度フォローを入れるつもりでいた三人だったが、さっそくその気持ちすら押し折られそうな勢いで琴葉家両親と東北家両親の神経を逆撫でしかねない発言をする彼女に、重みのある大きな溜息が洩れる。そんな風にしていたら、不意に家のチャ

イムが鳴り、あかりが玄関へと向かった。

その間にも、たまきが「いつそあかりちゃん家に置いてく？」と挙げれば、他の二人が「それはさすがに……」と止め、ずん子が「遠い親戚っていう事実を隠して従妹くらい近くしたらどうにかならない？」と挙げれば「それなら逆になんで今まで会ってへんかつつまれそうやな……」と茜に止められる。

「……三人そろって何やってるの？」

不意に、あかりの足音に伴ってこの部屋に入ってきたであろう客人の声が、三人の意識を一気に現実へと引き戻した。

「あ、葵ちゃん……ちよつとぶりだね。最近あんまり茜を迎えにもこないから……」

「こないから」……なに？ 学生時代から散々イチャついて周りから祝福されながら付き合いだしたと思つたら2年で破局してそのすぐ後に違う女を家に上がり込ませてなお元カノを家に上げて朝帰りさせるたまきさん？」

「ぐうの音もでないねえ」

「並べ立てた言の葉は全て事実なんやけどニュアンス的な印象が悪すぎやろ……」

葵から向けられる視線は氷のように冷ややかで、たまきを庇おうと前に出る茜を手で制して、二人は互いの視線を向け合った。

「あかりちゃんのこと、もうおじさんとおばさんには話したの？」

「いいえ。むしろ、言った方がたまきさんとしては助かってしまうんでしょ？」

「そうだね。一から説明をするよりは、尾ひれがついていようが互いの認識を共有していた方が手間は楽だよ」

「尾ひれ……私がそうするかもしれない？」

「あらゆる可能性は決してゼロにはならないってだけの話さ」

この時、ずん子はたまきの表情が意外なほど穏やかであることに驚いていた。元々、険しい表情とは縁遠いたまきであるが、彼は自分に対して明確な敵意を持つ相手には、親しい者からすると「薄ら寒さを覚えるような不気味で可愛い笑顔」をするのだという。

確かに、葵はたまきにとって親しい人物の一人ではあるだろう。元カノの妹であるよりも前に、学生時代の同級生であり友人の一人だ。だが、彼はそういった良好な関係性と敵意は両立し得ると考えていて、その前提を元に「敵意ある相手」には相応の対応をするはずだった。

しかしながら、今こうして葵に向けている彼の表情は、穏やかなれども笑顔ではない。薄ら寒さや不気味さはおろか、本当にただただ「最近話すことのなかった友人と再会した」ということに対して純粹な喜びを表現しているかのようで、それがずん子の中のたまき像とかけ離れているのだ。

「……ねえ葵ちゃん。僕と茜のこと、やっぱり——」

「認めない。認められるわけがない！ たまきさんとお姉ちゃんは、本当に最高の……理想の恋人同士だった！ なのになんで！ あんなに仲がよかったのに、好き合ってたのに、今だってお互い大好きなくせに！ なんで別れたりするの！ そんなの……意味がわからないよー！」

たまきが全てを言い終えるよりも早く、葵はそれを吐き出した。

ピクニツクを明日に控えた今だからこそ、彼女の抱えたものを解決はできなくとも、もう一度だけ自分に吐き出させる必要があると、彼は判断したのでだろう。

別れた当時にも同じやりとりはしたが、今は中立の立場にずん子がいるし、この件に関しては部外者ともいえるあかりもいることで、ある程度の冷静さや行動の抑制を担保した上でのことだ。

「意味……意味なら以前も話した通りだよ。茜と付き合い始めて、僕は茜に依存した。他の何を投げ捨てても茜を優先しようとしたし、それが茜の優しさに負担をかけた。それを解消し、心のケア期間を設けるために別れることを決めた。そうだよね、茜？」

「……全部たまきが悪いみたいない方は気に食わんけど、まあせやな。ウチはたまきにたまきそのままできてほしかった。ウチのために大事な友達との約束を蔑ろにしたり、無理にお金や時間を捻出して苦勞しとるたまきを見てられへんかった。せやから、そういうよくない

癖が治るまで、恋人はお休みしようなんて話や」

「だったらもういいじゃない！ たまきさんはもうお姉ちゃんのためだけに誰かを蔑ろになんてしてない！ お姉ちゃんのために無理なんてしない！ そのくらいもうできるでしょ！」

喉を枯らすほどに叫ぶ葵の様子を見て、たまきは思わず手を差し伸べかけるが、自らのもう片方の手がそれを制した。少なくとも今、この時点で、たまきと茜にその権利はない。それを察してか、様子を見守っていたずん子が葵へと寄り添った。

だが嗚咽と慟哭が囀る室内に、不意に転がり込んだ一言が、その場の空気を一変させた。

「…………いや無理じゃないですか？」

葵だけではない。4人全員の視線が、未だにせんべいを齧り続けるあかりに殺到する。

「無理…………って、どういうこと…………？」

未だに零れ続けるものを長い袖で拭い、しゃくりの止まらない声と睨みつけるような目つきが、追い詰められた猫のような殺気を醸し出している。

「どうって…………まんまですよ。え、たまきさんの話ですよね今の？」

だとしたら無理です、無理無理。たまきさんが茜さんのことを他の知人・友人と同じ扱いにできるわけありませんよ。だってこの人、わたしがどんなアプローチしても「茜じゃないから」って理由ではねのけるような人ですよ？」

「茜どうこう関係なく君は慎みがなさすぎるんだよ」

「そうは言いますけどね、自分で言うのもなんですけどわたしこれでもそこそこモテる方ですよ？ 中3くらいの頃から特に。好みもあるんでしようけど…………それでもだいたいのはわたしがちよつと緩めの服装をしてるだけでめっちゃ見えますよ。それがたまきさんときたら手を出すどころかガン無視！ 本気で自信なくしますよ」

「え、でもたまきってウチと抱き合って寝てる時たまに反応してんで」「人の股間事情を勝手に詳らかにしないで」

たまきが茜をどれだけ特別扱いしているかという話の流れだった

が、茜の誤射がたまきの背中を撃つ。

別れたはずの男女が未だに互いの体を抱き枕にしながら眠っていることについては葵の目つきが険しくなったものの、今のところは誰も指摘しなかった。

「わたしが全裸でお風呂に突撃してもピクリとも動かないアレが、茜ちゃんはどんなに布面積が多かろうとハグだけで剛直屹立^{ガン立}。こんな人が茜ちゃんと他の人を平等に扱えるかって話ですよ。さすがに約束の優先順位くらいは直すかもしれないですけど、隙あらばプレゼントしますし寝る時間を削つてでもデートにあてますよ」

「まあ、せやろなあ……。正直、ヨリ戻す条件がアホほど高すぎたんは最近ようやくと自覚してきたんよ。ただ、そうなると妥協点^{ハードル}をどこまで下げてええかわからなくなつとつてな……」

「あと僕もヨリを戻せるなら今すぐにでも戻したいよ。でも茜が認めしてくれるような僕になるまではそれはできない。だって、茜にはいつだって「茜が好きなの僕」でいたいからね」

「やめーやヨリ戻したくなるやろー!」

「だからさつきからさつきとヨリ戻せって言ってるじゃん!!」

ヨリ戻したい元カレ・元カノと、ヨリを戻させたい元カノの妹が集まって、どうしてこうも話がまとまらないのかとずん子は遠い目を見ながら今晚の夕飯を考えるのであった。

あんまりいじめちゃダメですよ

そして、その日は訪れた。台風やらなにやらで天候も不安定なこの季節、なぜかこの日ばかりは太陽も燦々と照り続け、ほどよく撫でるような風と汗が出ない程度の気温。間違いなく行楽日和という最高の条件の下で行われたピクニック。あかりは——冷や汗に頬を濡らしていた。

和気藹々と楽しくおしゃべりをしながらお弁当を楽しむ同級生組四名とは別に、なぜかあかりだけは和やかで優しいな雰囲気、琴葉夫妻＋東北夫妻のご近所親世代組に誘われ、そちらのお弁当箱をついていた。……同級生組が「あの感じなら大丈夫そうか」とあかりから視線を外すその瞬間までは。

それは本当に突然のことだった。突如、全身を襲う言い知れない怖気おぞけと寒気。秋の陽気としては十分以上の温かさを、どういうわけか全身の肌が受け付けない。頭のとっぺんから四肢末端に至るまで、まるで氷柱でも通されたかというように身動きがとれなかった。

ふと視線を上げれば、やはりそこには和やかで優しい表情の友人の親たちがいる。……が、その表情とは裏腹に、笑顔で細められた目には感情の光が灯っていない。否……否である。感情の光がないのではない。深淵ともドブ底ともいえるようなドス黒い光がその瞳を塗りつぶしているのだ。

「あかりちゃんはたまきくんのお友達かい？」

「は、はい……。たまきさんには、幼い頃によくしていただいた……。」「そうなんだ。うちの茜と葵もたまきくんとは長い付き合いだね。君はいつ頃からたまきくんとお友達に？」

「で、出逢ったのは十年くらい前ですけど、今くらい接するようになったのは去年頃からですね……」

先制を打って出たのは琴葉家の父であった。娘たち——特に今回の件に関しては徹底して茜の側についている彼は、まずは付き合いの長さ・深さで二回り以上離れた女子大生を相手にマウントをとりいった。

普通なら「大人げない」と他の親世代組の誰かしらが止めるべきなのだろうが、今回はどうしてか誰もそれを止めはしなかった。もちろん彼の暴挙にアクセルを踏むようなものはいなかったが、ブレーキもばっちりいなかった。

「十年前に会って、去年から仲良くなったんだ。ドラマを感じるね、どんな経緯なんだい？」

「子供の頃に親戚の寄り合いで出会って……。男の子はみんな外に出ちゃうし、女の子はもう親戚グループができて……。わたしも親戚なんですけど、だいぶ遠いのであんまり寄り合いにも参加したことなくて……。その時に、ゆかりさんとたまきさんが遊び相手になってくれた感じです……」

「それ以降は毎年？」

「いえ、その年と、その次の年の2回だけです。たまきさんは覚えてなかったみたいですけど、ゆかりさんがわたしの大学のOGで……。家でちよつとゴタゴタがあつて宛てもなく逃げてた時に、たまきさんを頼つてみたらどうかって言ってくれて……」

「なるほど、それで今に至るわけだ」

僅かな沈黙の後、琴葉家と東北家の男親二人が視線を合わせた。

すると今度は、東北家の父があかりに問いかけた。

「あかり君は、たまき君のことをどうおもってるんだ？ 仲のいい友達？ 優しい親戚？ それとも——」

「好きです。この場にいる誰にも負けないくらい、たまきさんのことが大好きです。将来を一緒にしたいと願う男の人として」

やや食い気味に、だけれどその眼には一切の曇りなく、あかりはその澄んだ瞳を大人たちに向けた。

仮にここで大人たち全員が敵に回っても、茜たちと遊んだりしゃべったりできなくなっても、あるいはこの恋心が叶わなくとも、それでもこの想いを自分で誤魔化すようなことだけはしないようにと、あかりは震える声と体を抑えながら、それでも決して揺らぐことのない目つきでその言葉を口にする。

「あかりちゃん、こっちおいで。みんなでポーカーやるよ」

そんなあかりの手を引いていくのは、いつものように朗らかに笑う
彼だった。

本当にただ何気なく、当たり前のように手を引いて、なんとなく楽しいところまで導いてくれる。それがあかりの好きな彼の「あたたかさ」だった。

「オトンもおじさんも、あんまあかりちゃんのことイジメたらんとい
て」

「あかりさん、ついでにクーラーボックスから飲み物もってきてくれ
ますっ。」

「あかりちゃん私の隣おいで。きりたんはウナちゃんと一緒にどっか
行っちゃったし」

そしてその「あたたかさ」は瞬く間に伝染する。彼があかりの手を
引くと、彼の友人たちもまた苦笑いと共にその「あたたかさ」を保と
うとしてしまう。誰一人、そこに冷水を浴びせることができなくな
る。今はまだ前と同じように仲良くできない葵でさえ、たまきのそん
な行動に異を唱えることをしない。

それは偏ひとえに、彼がこれまでに築き上げてきた友情と信頼の賜物だろ
う。実際、葵もたまきのことを嫌いになつたわけではない。たまきと
茜を想うがゆえの正論の暴走なのである。むしろあれだけ背中を押
されて両想いであることがわかつているのにヨリを戻さない当人た
ちがどうかしている。

「……あれは、肝が冷えるね」

「いい大人が子供をいじめるからですよ」

「あれ21歳が出せる眼光じゃなくない？　ちびるかと思つた」

「さすがに夫のおしめを換えるのはもう少し覚悟の時間が欲しいわあ
……」

ただ、それはそれとしてたまきも聖人というわけではないのであ
る。恋愛云々は抜きにして、自分に懐いて家事までしてくれる年下の
友人という意味では、間違いなくあかりのことを大事にはしているの
だ。

そんな彼が、自分のためとはいえ大人が友人一人を囲んで威圧して

いるような状況を放っておくことができるだろうか。それは断じて否である。とはいえさすがにここ最近のあかりの言動には多少なりお灸を据える必要があったので、ある程度は無視していたものの、乙女の恋心をつつくようなやり方は看過できなかった。

「あかりちゃん、向こうのお弁当おかずばつかやったやろ。これ葵が作ったフルーツサンド、めっちゃ美味しいから食うてみ」

「こっちがバナナだけ、こっちがイチゴとキウイ一緒のやつ。一人につき計3つまでだからね」

「じゃあバナナはたまきくんでき間合ってるからイチゴとキウイの方で」

「食べ物を選んでる時にいきなりシモの話を振るのはやめた方がいいよあかりちゃん」

「そもそも僕のバナナをあかりちゃんに間に合わせたことないんだけど?」

「お姉ちゃんには間に合わせたの!?!」
「いやウチも別に間に合^おうてへんわ」

まるで「間に合う」が別の言葉を指す隠語かのように使われる流れになってしまったことに一抹の困惑を抱えながら、たまきは敢えて何も言わなかった。



ピクニックから帰る頃には、たまきは大人組に捕まってデロデロに酔わされ半ば夢の世界に旅立っていた。

ここに来るまで、たまきの軽すぎる体躯を背負ってきたあかりは少なからず疲れもあったが、両手で彼の尻の感触を楽しんでいたため疲弊する体力ゲージを遥かに上回る量を回復していた。

そして限界を重複した回復値はそのまま性欲にチャージされ、泥酔したまま「むにゃむにゃ」と可愛い寝息を立てて寝ているたまきは、もはやカモがネギと鍋をしょって皿の配膳まで済ませてまな板の上で寝ている状態なのである。

「すう……すう……」

「こ、これは医療行為です……胸元のボタンをひとつふたつ開けて息苦しくないようにさせてあげようという思い遣りであって決してやましい気持ちなんてありません——あれ、ボタン全部ほどこいちゃいましたね」

純粹な気持ちでシャツのボタンを外そうとしたはずがどういいうわけか。

「いやいやこれはよくありません。すぐに元に——うわエツロ……なんてセクシーな鎖骨してるんですかこの人。……おっと、性癖と本音が抑えきれず鼻から情熱が……」

純粹な気持ちで鎖骨をチラ見したただけのはずがどういいうわけか。

「シャツをズボンに入れてるとお腹が圧迫されて苦しいでしょうからシャツをズボンから出してベルトを外してズボンのボタンを……あーっ！ いけません！ 男の人のそれとは思えない白くてすべすべの肌が！」

純粹な気持ちでズボンのベルトとボタンを外しただけのはずがどういいうわけか。

「少しくらい触ってもいいですよ？ いいですよ。いいですよ。も。いっそのままズボンも下ろしてファイバーしちやいま——」

「そこまでや」

「止まれ」

「それ以上いけない」

純粹さは時に儂く散り逝き、背後に迫る三人の鬼たちが天誅を振りかぶる。

ぱしーん、と気持ちのいい音とともに後頭部と背中と尻をフルスイングされたあかりは、悲鳴と共に床と熱烈なキスを交わし、その声の元をたどるように視線を向けた。

「茜ちゃん、葵さん、ずん子さん……どうしてここに……」

「監視や監視。あんなデロデロに酔っ払ったたまきを性欲の獣がよだれ垂らしとるこの家に放つとくわけあらへんやろ」

「まあそうでなくともたまきさんってお酒にめちやくちや弱いので夜

中に吐いて吐瀉物が喉につまって死にかけたりしますし」

「あかりちゃんの監視半分、たまきくんの寝ゲロ対策半分かな」

「そんなー！ と崩れ落ちるあかりを簀巻きにし、三人はローテー
ションを決め始めた。もちろんたまきはバツチり吐いた。」

終わりの始まり

時の流れとは早いもので、あかりが結月家にやってきてから1年が経った。そんな折、たまき宛てに届いた一通の手紙に、二人の今後は大きく揺らぐことになる。

送り主はあかりの父からであった。たまきは彼女がこの家に押しかけた理由をこれまで問い質したことはなかったが、ゆかりからうっすらと聞かされていた。ようは、過保護な親の余計なお世話が嫌で家を出してきた、ということだった。

たまきはその「余計なお世話」が何かは知らなかったが、手紙にはその内容も詳しく書かれていた。

手紙はまずあかりへの謝罪の言葉から始まった。

『あかりへ。まずは先に君の家出の発端となったやりとりを謝りたい。本当にすまなかった。そして、父としてどうしてあんなことをしてしまったか、言い訳になってしまいが私の視点から説明したい』

『あかりは子供の時から朗らかに笑う子で、小中高と本当にまじめな子だったね。それでいて、たくさん友達にも恵まれて、私にとって本当に自慢の娘だった。今だって、目に入れても痛くないほどだ』

『しかし、そんな君が恋人の一人も作らないことに、私は安堵と不安を併せ持っていた。近年、同性同士でのカップルも珍しくはないし、もしかすると同性にそういう相手がいて、私たちに打ち明けられないでいるのではないかと思っただけで、そうでもないようだった』

『だから、私はせめて君に苦勞をかけず、君のことを心から愛してくれる相手を探そうと、今思えば大掛かりで下世話な真似をしてしまった。重ねて詫びさせてもらいたい。本当にすまない』

『そして、きつとこれと一緒に見てくれているだろうたまき君へ。義姉さんの甥である君のことは、勝手に申し訳ないが親戚伝いに為人ひととなりを聞かせてもらった。あかりのことは本当に突然だったはずだけれど、受け入れてくれてありがとう』

『あかりがどんな想いで君を頼ったのかは、私にはまだ量りかねている。もしもあかりが君に好意を抱いているのなら、親としては応援し

たい気持ちと寂しい気持ちが隣り合って存在する』

『あるいはあかりが無理に居座っているのなら、もう私たちはあかりに無理な見合いや相手探しをしないと誓うので、強い意志でこちらに送り返してもらっても構わない』

『いずれにせよ、親子のいざこざに巻き込み、一年の冷却期間を押し付けてしまった身として、近々そちらに謝罪と挨拶に伺うつもりだ。二人が家にいる日時も含めて、お返事をお待ちしている』

たまきは手紙の内容に一通り目を通した後、ひと呼吸置いてからあかりに視線を向けると、彼女は複雑そうな——少なくとも怒っているようではなく、寂しさと困惑が縋い交ぜになったような表情でその手紙を見つめていた。

少なくとも、自分の恋路に勝手な茶々を入れた父のことを今でも許せない、というような様子ではなかった。下世話であることは間違いないが、父の不器用な優しさと、心の底からあかりの将来を案じたからこそその行いであったことは、彼女に間違いなく伝わっているようだった。

そして、その文章の端々からひしひしと伝わる父の想いに、郷愁にも似た何かを抱いているのだろうか。もしくは、帰る帰らないはともかくとして、もう一度だけ真正面から父の顔が見たいという願いからくる表情なのかもしれない。

「あかりちゃんはさ、お父さんのことを今でも許せないとか、そう思ってる?」

「……いいえ。最初は「どうしてそんな勝手なことをしたの」とか「あなたの未来を決めないで」とか色々思うところはありましたけど……。でも、それもお父さんがわたしのことを大事に思ってくれたからこそさだっというのは、この手紙でわかりましたから」

「じゃあ、帰りたい?」

「……それは、ちよっとわかりません。お父さんと一度ちゃんと話したいと思います。でも……たまきさんと離れ離れにはなりたくないです。たまきさんの近くに居たい……。ずっと今のままじゃいられないのはわかってます。でも、この気持ちに整理がつくまでは

……」

あかりは手紙を見つめる視線をゆっくりと上げて、たまきをまっすぐに見つめた。

その青い瞳に映るものが、まるで彼女の世界に映る全てなのだと言うように。

「たまきさん。今まで何度も言ってきましたけど……でも、こうやって目を見つめ合って言うのは初めてですよね」

「……うん」

「……わたしは、たまきさんのことが好きです」

「うん」

「幼い頃、わたしの寂しさを埋めてくれたあの日からずっと……たまきさんだけを追い続けてきました。家を飛び出して、ゆかりさんを頼って……わたしの想いを知ったゆかりさんがこの家での同居を認めてくれた時は、天にも昇るような気持ちでした」

「……うん」

「茜ちゃんはいいい眼をしますね。たまきさんの良さを知ってくれている女性がいたことが嬉しかった。そして、茜ちゃんもいい女です！

茜ちゃんみたいな人に想われるたまきさんを好きになれて本当に良かった」

「だけど、とあかりは一拍おいて、

「茜差すような眩しい光と違って、継を紡ぐ星のあかりは小さすぎて……大好きなたった一人さえ照らせない。悔しいですけど……わたしはきつと茜ちゃんには敵わない」

震える声。潤む瞳。それらを必死に抑えながら、あかりは告げる言葉が続けていく。

「大好きです。本当に本当に……心から、この先きつと誰にも替えられないくらい、あなたのことが大好きです」

「……」

たまきは応えなかった。あかりの想いに応えようと思えば思うほど、彼女の言葉に返してはいけないことを知っていた。

「たまきさん……あたしと、付き合ってください」

「……ごめんね」

そしてありがとう、とは言えなかった。たまきはあかりと過ごしたこの一年間で、彼女が自分に向けてくれた想いが間違いなく本物であることを知っていた。だから——ありがとう、とだけは言えなかった。それは、その思いを受け入れない自分が言えば、彼女の心を踏みにじるだけだから。

「……君がこの家に来てから一年、僕らは色んな話をして、色んなことをした。君の起こすトラブルに身の危険を感じたことは多かつたけれど……同時に君は常に僕のことを考えてくれていた」

「……」

今度はあかりが静かにたまきの言葉を聞く番だった。

「君はよく僕の寝起きにベッドに潜り込もうとはしたけれど、寝ている時に夜這いをかけたりはしなかった。お風呂に突撃してきた時はさすがに身震いしたけれど、力で押し倒すようなことはしなかった。君は僕を誘惑しようとする裏で——常に公平だった」

「……はい」

「君は僕の弱さを否定しない。弱い僕を受け入れた上で……ずっと僕を笑顔にしようと頑張ってくれていた。何度も変なアプローチをしてきたけど……常に僕を気遣っていた。それが僕はすごく嬉しかった。だけど……だからこそ君に対してだけは嘘をつきたくない」

「はい」

たまきは静かに深呼吸をすると、あかりに最後の言葉を告げた。

「僕には、君よりも好きな人がいる。だから君を幸せにはできない」「はい、知っています。あはは……一年も一緒に住んでたら、誰にだってわかりますよ。まして……わたしはずっと、たまきさんのことだけを見てたんですから！」

「……そうだね」

じゃあそろそろお開きにしましょう、と言って二階の私室に戻っていくあかりの背を、たまきはただ見つめていた。

男なら……あんなにも小さく弱々しい背中を見たら追うべきなのかもしれない。だけど……たまきは追わなかった。それが、そんな小

さく弱々しい背中への誠意だと思ったから。

二階から聞こえる声は、今までに聞いたことがないような切なさで、それが聞こえなくなるまでたまきはその場にただ佇んでいた。

これは、一人の少女の恋心が終わった夜の出来事。

そして……停滞し続けていた全てが動き出す、始まりの夜の出来事。

弱くて情けない僕だとしても

10月も末に近づくと、街はハロウィン一色。結月家でもジャック・オ・ランタンの被り物を作って玄関先に置いたりして、この季節だけの楽しみを満喫していた。

あの後、あかりは三日ほど実家に戻っていたが、帰ってきた頃にはすっかりいつもの調子を取り戻していた。それでも、これまで通りではいられなくなったということはたまきにも理解できた。あかりからのセクハラがなくなったからだ。

相変わらず、過激なスキンシップはなりを潜める様子もない。しかし、そこに明確な下心を露わにすることはなくなった。ただ、セクハラではなくスキンシップとして割り切ったせいもあってか、今まで以上にハグや握手などの恋愛に限らない接触到躊躇がなくなっていることは予想外であった。

「……あかりちゃん、大丈夫なんか？」

「どうだろう。少なくとも僕は僕なりに誠実な対応をしたつもりだよ。あかりちゃんには酷なことだったかもしれないけどね」

その日、家にはたまきと茜の二人きりだった。あかりは葵と共に東北家に遊びに出ていて、ここにはいない。

それまでたまきにはかり視線を向けていたあかりが、元より仲はよかったものの優先順位を後に回しがちだった葵やずん子たちと仲良くしている様子は、たまきとしても安堵の息が洩れた。

同時に、葵からの気遣いのようなものも感じられた。あかりとの間で交わしたやりとりを、他でもなくあかり自身が葵に告げたようだった。茜はその話を葵から断片的に聞いただけで、経緯や全容までは知らないらしい。

「ウチ、負けるんならあかりちゃんにだけのつもりやったんやけどなあ……」

「僕は茜以外を選ぶつもりはないよ」

呆気にとられてしているような、あるいは虚しさと切なさを併せ持ったような表情の茜に対して、たまきは今までとは少しだけ違う様子で声

を上げた。

これまでのたまきにとって、茜は「唯一」であったのである。様々な女性と接する機会があったが、たまきの中で「恋人」として見られる女性は間違いないく琴葉茜ただ一人であった。

しかし、今のたまきの中では既に茜は「唯一」ではなくなっていた。恋心とまではいかないまでも、自分の中であかりもまた大切に特別な女性であったことに、彼女を拒絶した時ようやく気付いたのだ。

「あかりちゃんは……僕自身も気づかないうちに、僕の中で特別な存在になっていた。大切に愛おしい女の子になつてた。でも……でもね茜、それでも僕は君を選ぶよ。あかりちゃんも大事な子だけど、僕の身も心も捧げられる相手はやっぱり、君なんだ」

「……なんや、プロポーズか？ そんな言われても——」

「そのつもりだよ。僕、やっと決心がついたんだ。今までは君は僕の『たったひとりの特別』だった……でも、もう君ひとりじゃない。あかりちゃんも僕の特別な女性になった。けど……僕の一番は君だ、茜。君がほしい。僕の全てをあげるから、君の全てをくれないか」

「……………」

声もなく、茜は泣いていた。その涙が意味するところをたまきは知らないが、彼はゆっくりと席を立ち、茜に寄り添った。

「そうか……今ようやくとわかった……。ウチがほんまに欲しかったもの……ウチがなんでたまきと付き合^おうてる時に納得できへんかったんか……」

「……………」

「うちは……たまきの特別になりたかったんやない……。たまきの一番になりたかったんや……。だから、ウチのことしか見えてへんたまきを受け入れられへんかった……。なんや、拗らせてんのはウチの方やったんか……！」

「でも、今は他の子のことも見えてる。色んな人の魅力がわかった上で、僕は茜を誰よりも愛してるんだよ」

そつと抱きしめながら、たまきは茜の背中をゆっくりと撫でる。

そう——二人の関係がこじれた原因は、実はたまきではなかった。確かに付き合っている女性のために他の友人たちを蔑ろにするのは良いことではないし、たまきらしくもない。しかし、それが女性と女性の友情ならともかく、男性と男性の友情においては、その限りではない。

あくまで男女の友情に関する「傾向」の話ではあるが、男性は「迷惑をかけても大丈夫だと思えるのが友達で、迷惑をかけたくないのが恋人」であるのに対し、女性はその逆で「迷惑をかけたくないのが友達で、迷惑をかけても大丈夫だと思えるのが恋人」という話がある。

つまり、男であるたまきが「恋人を優先して男友達に」「ごめんまた今度でいい？」と訊ねても、相手の友達が男であればそこまで嫌悪感はないのである。だとしても、それが友達や知人に優しいたまきらしい反応ではないことは間違いないのだが、それに解釈違いを起こして別れ話に発展したのは、間違いなく茜側に違和感がある。

そして今ようやく、その理由が明らかになった。茜は「恋人のために友達や知り合いを蔑ろにするたまき」に解釈違いを起こしていたのではなく、たまきが自分のことを「一番」ではなく「特別」として扱うことに対して危機感を抱いていたのである。

「たまきは、ほんまにウチのこと大事にしてくれとったやろ……。でもな、ウチはそれが信じられへんかった……。たまきがウチを選んでくれたんはあくまでたまきにとってウチが「たったひとりの特別」やと思っただから……。もし、ウチやない「特別」が現れたら、ウチはすぐに捨てられてまうんやないかって、怖くて……。それで……！」

「そうだね……。当時の僕ならそうだったかもしれない。だから、茜の不安は尤もなんだよ。でもね……。それをあかりちゃんも、もうひとつの特別が教えてくれたんだ。どんなに僕の特別が増えていっても、やっぱり僕が心から求めているのは君なんだって。僕の「一番」は君なんだって。だから、泣かないで。僕は、君の笑顔が好きなんだ」

その後、茜はしばらく泣いていた。今まで支え続けてきたたまきに支えられながら、縋るように、甘えるように。

そうしてどれだけか時間をかけてようやく顔を上げると、彼女はに

こりと笑いながら告げた。

「たまき、今まで疑^{うた}うてしてもほんまにごめん。ウチ、こんなやからこれからも変に勘ぐったり、ぎょうさん迷惑かけると思うけど……それでも、ウチのことを一番好きでいてくれる?」

「もちろん。僕の方こそ、茜にはさんざん不安にさせだし、迷惑もかけた。後で一緒に葵ちゃんに謝りにいこう。ずんちゃんにも心配させだし、苦勞をかけたと思う。それに……」

「あかりちゃんやろ。うん……たとえ嫌われても、ちゃんと言うた方がええと思う。追い打ちみたいな風になってまうんは、心苦しいけど……」

刺されたりしたらどうしよう、と言うたまきではあったが、あかりがそんなことをするような人間でないことは、他の誰よりたまきが一番わかっていた。

ただ、必ずしも祝福の気持ちだけではいられないだろうということもわかっていた。彼女がどんな気持ちで——どれだけの想いを抱えながらあのタイミングでたまきに告白をしたか、推し量れないような二人ではなかった。

「……たまき」

「なあに、茜」

「うちが白髪のおばあちゃんになっても、一緒に居^おつてくれるか?」

「君こそ、僕がつるつるのおじいちゃんになっても、好きでいてくれる?」

問いに問いで返すと、二人はくすくすと笑い合った。

「茜は白髪になっても綺麗なんだろうね」

「たまきがハゲるんは想像できへんけど、ほんなら今よりちゅーできるところが増えるっちゆうことやろ。望むところやわ」

始まりの一步を終えて、終わりのない始まりを二人は歩む。この道の先にある未来が、継を紡ぐ星のあかりが見守る茜色の光に包まれていることを切に願いながら。

貧弱で脆弱な彼でなければ守れない少女と、緩やかで穏やかな一步一步を紡いでいく。